明治三十七年二月一日發行（毎月一回一日發行）

求道

第壹卷

第貳號

求道第一卷第二號

目次

◎信仰の實驗を論して戰爭の意義に及ぶ　（社說）　常盤大定
◎大悲の攝取
◎日曜講話
◎執持の解　近角常觀
◎最大の不幸　太田秀穗
◎毎月教壇
◎佛教の眞髓　近角常觀
◎同一鹹味
◎見えざる力　百目木劍虹
◎無題錄　鈴木卓苗
▲信仰問答自序　近角常觀
◎精氣之極　八十三翁
◎信仰問題
◎予か信仰に關する質疑に答ふ　近角常觀
◎風尙餘韻
◎友と訣る　天都城波岡茂
◎友に與ふるの詩
▲新刊紹介▼
◎政教時報
◎高等師範學校佛教會◎大宮の教勢◎第二求道會◎日曜講話の概況◎遠足會◎海外の佛教同盟會◎職は開かる◎內務省◎ニコライ主教の態度◎政教◎教界◎編輯餘錄

日曜講話

毎日曜午前九時より開く

土曜講話

毎土曜日午後二時より

求道學會

（本郷森川一）

第二求道會

（九段坂）

求道

第一卷
第二號

信仰の實驗と論じて戰爭の意義に及ぶ

信仰は人生に於ける自覺也、自覺は實驗の結果也。大厦高樓巍然として雲表に聳ゆ、青甍朱楹之を飾り、門牆窓牖整然として趣を爲す。俗人は其邊幅の修飾を見て其美に眩惑せられむとす。然れとも一たび風雨地震に遇ふ、壁壞れ、門倒れ、色彩風雨に洗はれ、裝飾泥土に委す。而して猶居然として其大觀を改めざる所以の者は、所謂大黑柱なる者中心を貫きて、確然不動恰も地盤より生へ拔きたるが如きものあるに職由せずむはあらず。而も其大黑柱なるもの平素は最も見安き所にありて、最も人の注意を惹かざる者、忽爾天來の激變其修飾を奪ひ去りて、始めて家屋眞個の面目を露はし來る。是洵に實驗の結果自覺の地位に達せるもの。宗教の信仰なる者、人生に於て此の如きの自覺を實驗するの謂にあらずや。

人生眞個の面目は如何、或者は富を以て人生の眞面目と爲し、或者は位を以て人生の眞面目と爲し、或者は學問を以て人生の眞面目となし、或者は健康を以て人生の眞面目となし、或者は妻子を以て人生の眞面目と爲し、或者は建業を以て人生の眞面目と爲し、或者は教化を以て人生の眞面目と爲す。而して人生より此等の富と位と乃至建業と教化とを奪ひ去らは如何。人生果して空しきか、將た或者を存するか、汝の衣を奪へ、汝の手を奪へ、汝の口を奪へ、汝の身體を奪へ、而して猶奪ふ可からざる者なきや如何。

昔者、希臘デルハイ神殿の門に刻して曰く、『汝自身を知れ』と、一言以て希臘文化の精粹を盡せる者。ソクラテスの智識、プラトンの理想、畢竟其意義を擴充して幽玄の極に達せる者、今古の哲人の實驗し、又實驗せしめむと企てし所、此自覺の外

ならず。孔子三十にして立ち、孟子四十にして心を動かさず、大聖釋尊に至りては眞個に是大覺なる者、始覺なる者、本覺なる者。佛陀とは何ぞや、既に釋して自覺、覺他、覺行窮滿といふ。實に佛陀は千古自覺の標本なりと謂つべき也。

經に譬喩を說きて曰く。人ありて年幼稚にして父を捨て、逃れ逝きて久しく他國に住すること。或は十年、二十年、五十歲に至る。年既に長して益々困窮を加へ、四方に馳騁して衣食を求め、漸々遊行して遇々本國に向ふ。其父先つ來りて子を求むれども得ず、中途にして一城に止る、其家大に富み、財寶無量多く僮僕あり。時に貧窮の子、諸の聚落に遊び、國邑を經歷して其父の止る所の城に到る。父毎に子を念ひ、子と離別してより五十餘年、未た嘗て人に向て此の如きの事を說かず。但自ら思惟して、心に悔恨を懷く。自ら念ふ、我老朽にして多く財物あり、而して子息あることなし、一旦身沒すれば財物散失して委付する所なし、是を以て慇懃毎に其子を憶ふ。其時窮子展轉して父の舍に到り、住して門側に立ち、遙かに其父の莊嚴華麗なるを見て、即ち恐怖を懷き、竊かに是念を作さく、是或は王ならむ、我等の近く所に非すと、疾走して去る。富める長者は我子の忽然として來れるを喜ひ、使者をして往て捉へしむ、窮子驚愕して怨を稱し大に喚ふ、使者强て牽き還らむとす、窮子自ら念すらく、我罪なくして囚らはれむとすと悶絕躃地す。父遙かに見て之を止め、冷水を以て子の面に灑きて醒悟せしめ、其意に隨て趣かしむ。窮子喜びて貧里に至りて衣食を求む。爾時長者其子を誘引せむと欲して、方便を設け、密かに二人の形色憔悴して威德なき者を使はし、誘ひて供に糞を除かしむ。他日父窓牖の中より遙かに子か衰へたるを見、即ち瓔珞を脫して、垢膩の衣を纏ふて其子に近き、物を與へ人を使はしめ、且告て曰く。我年老大にして汝は少壯なり、自今已後生む所の子の如くせむと。即時に長者更に字を作り、之を名けて兒と爲す。爾時窮子、此遇を欣ふと雖、猶自ら客と謂ひ、賤人と作す、是故に二十年中常に糞を除かしむ。是を過ぎて後、心相體信、入出難なし、爾時長者疾あり、自ら將に死せむとして久しからざるを知り、窮子に語りて曰く。我今多く金銀財寶あり、汝悉く之を司れと、窮子敎を受けて物を領するも下劣の心未た能く捨つべからず。父命終らむとする時に臨み、其子に命して親族、國王、大臣、刹利、居士を會し、即自ら宣言して言く、諸君當に知るべし、此は是我子なり、我の生む所なり、某城中に於て我を捨て遁去る、玲瓏辛苦すること五十餘年、其本の字は某、我名は某甲、此は實に我子也。我は實に其父也、我有する所の一切の財物皆是れ子が有なりと。是時窮子父の言を聞き、即大歡喜して、未曾有を得。而して是念を作さく、我本、心に希求する所あることなし、今此寶藏自然にして至ると、此大富長者は則是如來なり、我等は皆佛子に似たり、如來常に我等を說て子と爲なし玉へりと。嗚呼是深遠なる實驗にあらずや、偉大なる自覺にあらずや、此に至りて一言にして盡く。曰く自覺とは吾人佛子人生に於て此の如き慈悲慇懃なる如來の父を認るの謂にあらずや。

近時道を求むるの人、頗る繁く、其行路屈折迂回して最も複雜を極め、何れも遂に其本城に到達せらるるを見て坐ろに嘆咏の聲を發せずむはあらす、吾人は其實驗を味はむと欲す。人あり、居常佛を信じて安んずる所あり、忽爾として人生の問題に逢着して一大苦悶に陷る、而して佛陀光明中猶何故に苦悶あるかを疑ひ、苦悶益々加はり週日安眠を得ず。然るに佛陀は其苦悶あるが爲めに救濟を下し玉ふことを覺るに及びて苦悶頓に去りて忽ち光明の中に在り。又人あり。年七歲にして求道の念頻也、爾來繼續すること十七年、爲めに學を廢し、家を捨て、身を擧げて傳道の事に從ふ。然れども心中の垢穢拂拭するも去らず、念々稱名常に懺悔して猶懺悔し盡し難きものあるを憂ふ。而して一たび「外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ、內に虛假を懷けば也」との德音に接するに及びて初めて佛陀絕對の慈懷に抱かるゝの感あり。又人あり。親友昨年人生の解し難きに苦悶して身を投じて死す。此に於てや胸中寂寥懊惱の情に堪へす、爾來一年憂鬱昏々として身を措く處を知らず、能ふべくむば忽然として人世已外に消失し了せむことを欲す。此に於てや、從來胸中に於て形作られし信仰は全く破壞し去りて一點の光明なく、唯ダンテのインフェルノーを繙くときは語々肺腑を刺すの思ありといふ。而して吾人苦悶の經驗を以て滿腔の同情を表したる時に於て、心絃の共鳴するものあるを感じたりき。又人あり。滿身の友情を以て其最も愛するの朋を遇す。而して朋の無感覺なる其厚情に對して、毫も感應孚動あることなし。此に於てや、人生の頗る冷かなるを感じ來りて鬱勃の情禁する能はず。憂悶頗る鬱屈して遂に出づる所を知らず。而して恰も他の信仰の實驗を聞くに及び忽にして心自ら融和して心底既に佛陀悲愛の靈光を以て照され、煩悶宿夢の如く消し去りて座ろに感謝の涙頤に交るに到れり。又人あり。意志頗る强固、心中大に期する所あり。交を絕ち、京を去り、北海道に遁れ、困苦辛さに嘗め盡して、遂に志漸く報ひ、事將に順境に向はむとす。忽ち病魔の

爲めに襲はれ空しく病院に呻吟す。此に於てや、頗る人生問題の解決すべからざるに苦しみ、友に訴ふるに胸中の苦悶を以てす。蓋し此人、彼の天人論の説明を以て理論的根據を形作ると雖、實際上未だ安慰の境に達せず。而して吾人一たび人世の必しも期すべからざるを説きて、獨り佛陀の威力のみ信賴すべきを示すに及び、道理已外に安心の樂地を開闢し來りて心中恰も一大平野の花園に出でたるの感あり。床上仰臥の生活却て既往最得意時代よりも一層の愉快ありて病亦却て閑なるに至れり。又人あり、文筆を採りて新聞記者と爲り、他の缺點を指摘して筆端炎を爛す。一壯士あり此新聞を材料として脅迫取財の罪を犯す、記者遂に共謀者を以て目せらるゝに到れり、乃直に獄に投せらる、出て後遂に沈淪落魄底止する所を知らず。其後相當の地位を得ることありと雖、此瑕瑾の爲めに忽ち他の乘ずる所となり、其職業を失ふに至る。此に於て、放浪數月、父母に請ふて哀を垂れむことを求む、父母肯んぜず。乃ち人生の價値なきを悟了して、既に死を決し最後の覺悟を以て日曜講話に參會す。講終りて歔欷嗚咽して座を起つ能はず。乃ち吾人事を詳かにし、獨り佛陀を以て唯一の立脚地と爲し、確然自立して、一點も他に賴るべからざるを説く。此人頓悟して、佛命に安住して、歩々堅く踐み、再び人生に復活して向上の道を辿る。身檻縷を纏ふと雖、心至極の境にあり。

已上列擧するが如き僅かに最近二三週間に於ける實例のみ。蓋し人生の行路洵に知るべからず、思はさる所に陷穽あり、期せざる所に活路あり。其前後を達觀して其終始する所を察するに、皆是吾人佛子未だ佛子たることを自覺せざるものをして、慈悲の父母を覺知せしむるの一大悲劇たらざるはなし。嗚呼竫嬶辛苦五十餘年、人生のあらゆる場合に於ける實驗を嘗め來りて、最後に於て消せず、磨せず、天動き地碎くるも確然として吾人が立脚の地盤たるもの實に是人生自覺の一大信仰なるものにあらずや。近時吾人最親の友其父の訃を傳へて曰く。病床十日唯佛恩の深きを嘆し、專ら稱名絶ゆることなし。死前一日舌剛ふして言ふべからず、六指を出し、合掌して他に六字稱名の忘るべからざるを諭す。家人信徒枕頭に集りて暗涙滂沱粛みて教を受く。訃傳はりて遠近集る者一千人何れも父母を喪するが如し。誠に信仰の威力廣大なるを感知して、私かに感泣慚愧に堪へざるなりと。又最愛の友は其信界を披瀝して曰く。庭前の栢樹春既に動きて小雀飛下ること葉の落つるに似たり。一見潸

然として涙下る、人笑て何の故たるを問ふ。我亦答ふる所を知らず、唯胸中憂深くして言ふべからず。是吾人至愚の輩をして崇高の理想を解せしむるが爲に佛陀の特に與へ玉ふ恩寵也。蓋し人生は春の野に於ける蕚の如きか、香清く色美なりと雖僅かに是五十年の幸福なり。之を追ふ快は乃快なるも首を回らせば是れ醒め安き一場の春夢のみ。蓋し、現世已上、より大なる幸福あり、より高き理想あり、悠久にして崇高なり、是共に往くべき極樂の世界なり。吾人下劣垢穢の輩益々彼の清くして淨らかなる佛陀の光明を仰ぎて、冀くは其門に入るの時之に入るに愬ぢざることを期せむかなと。

觀じ去り觀じ來れば、人世の眞意義は洵に深遠なり。世上吊して不幸といふ、何ぞ。知らむ、是偉大なる敎訓の其頭上に下れるにあらざらむや。人生呼むて不運と云ふ、何ぞ知らむ是深奥なる修養を實驗すべき大命を被れるにあらずや。人生は慥かに暗黑なり。然れども闇黑は是光明に接觸し來りて初めて多大の意義を生じ來る。吾人審かに人生の歸趣を察するに彼の病めるもの、彼の健かなるもの、彼の泣けるもの、彼の笑へるもの、東する者、西する者、其狀千態、其路百拆、殆むと端倪すべからざるものありと雖、皆是滔々百川の流下して大海に朝宗するが如く、皆人生の實驗を重ね來りて佛陀慈悲の海中に集り來らざるはなし。フアウスト暗燈の下孤影寂然として、四十年來の修學、依然一个の愚漢に過ぎざるを悲み、倩々人生の解し難きを嘆く。遂に惡魔メフヰストーフェレスの爲めに誘はれて審さに小人生、大人生の經驗を嘗む。初は其愛する少女と共に人生の苦きを味ひ、後に濟世利民の事に從ふ。一朝洪水氾濫し來りて、多年の經營忽ちに破る。彼喟然として人生を嘆じて曰く。待て暫ばし、汝は實に美はしき哉、我地上の足跡は彼の永刼の上に印せらるゝ事なしと。嗚呼人生は慥かに是惡魔の誘惑にして、首を回らせば直ちに是佛陀の光明の顯現にあらずや。是釋尊が菩提樹下に苦驗し玉ひし所。親鸞聖人が吉水の禪室に感泣し玉ひし所。八萬四千の煩惱は忽ち八萬四千の光明に照されたり、亦何ぞ善と惡とを問はむ。佛を信ぜむには他の善も要にあらず、佛に優るべき善なければなり。惡も恐るべからず。佛を妨ぐる程の惡なければなり。此に於てや、吾人人生とは人間自覺の眞意義を發揮して、一に如來の靈勅に從ひ、以て彼の樂土の理想を實現するの謂にあらずや。

既に個人の自覺、人生の意義、此の如しとせば、國家に自覺、社會の意義なるもの亦此の如けむのみ。ロッチエ言はずや、

世界は大なる宇宙にして個人は小なる宇宙なりと。既に個人小宇宙の上に自覺あり、豈國家社會の上に大自覺あらざるの理あらむや。若し國家社會にして大自覺來らむか、之が先驅として一大苦悶に陷らさるべからず、是實に國に戰爭あり、社會に改革ある所以にあらずや。三冬凛烈の風霜を凌ぎて初めて梅花南枝の清香を放ち、霹靂天地を動かし去りて夕陽青山の光景を描き來る。看よ古今清明の世、之に先ちて大戰鬪の修羅場を見るにあらずや。干戈は固より兇器なり。誰か戰爭を以て神聖と言はむや。然れども確かに是れ國民の修養なり、社會の一大經驗なり、苟も精神的問題に注目するもの此點に向て一大警醒を加へさるべけむや。

昔者我國上古常に三韓に事あり。仲哀帝の熊襲勦絶、神功后の三韓征伐を初めとして歴代之に苦まざるはなし。聖德太子震怒して三たび新羅の强傲を折きて任那百濟の弱を助け玉ひしといふ。遂に交を隋に開き、對等の禮を取りて曰く。日出國の天子書を日沒國の天子に致すと。遂に三寶を興隆して國民は偉大なる自覺を生ぜり。又平安朝の末葉源平の二氏全國到る處に血鬪し、國民は前古未曾有の苦悶中に沈淪せり。修養漸く成るの日、文永弘安の役來る、艨艟十萬海を蔽ふて到る。此時に當りて國民は實に自覺の極點に達せり。時宗毅然として起ち、上皇肅々として禱る。兵備必しも完全なりしに非ず、策略必しも精密なりしに非ず。然れども耿々たる內心の信仰は居然として堅城鐵艦の如きものあり。是風雨一過清明の天地を開きし所以、看よ日本佛敎の精華は實に此時代に鍾れるにあらずや。

明治維新の改革は開國問題を以て點火し來り、十年の內亂は征韓論を以て中心となす、而して日清の戰、實に東方問題の警鐘たりしにあらずや。而して今や我國民は全力を傾注して露國と戰を交ふるに至る。稱して日露戰爭といふ、何ぞ知らむ是世界の戰爭也、文野の決鬪也、東西文化の勝負也。首を回らして過去を顧る、國家は實に今日あるが爲めに多年の準備を重ねたるが如し、而して今亦最も慘憺たる修養を重ねんとす。今や國民は世界の舞臺に起ちて空前絶後の一大自覺に達すべきの時にあらずや。聖天子上にあり、忠勇の士國に殉するあり、捷報頻りに至り、國民亦沈着の風あり、是頗る喜ぶ可き也。然れども、國家はたとひ門牆を破壞するも實に大黑柱のみ以て立つべきの覺悟なかるべからず、國民はたとひ手足を奪ふと雖猶奪

ふ可からざるものあるを確信せざるべからず、必ずや遂に自覺覺他の圓滿なる結果を持來すこと期して待つべき也。維新已來國民は有形的經營に忙はしくして、祖先已來修養し來りたる圓熟せる信仰を忘る、是所謂長者の窮子なる者、鈴蟬辛苦遂に大覺慈父の光明を認むべし。而して彼惡魔修羅の血鬪を照耀して、二十世紀の舞臺に於て平和なる社會を開き、清淨なる樂土を實現するを期す可き也。

Nur der verdient, sich Freiheit wie das Leben,

Der täglich sie erobern muss.

Und so verbringt, umrungen von Gefahr

Hier Kindheit, Mann und Greis sein tüchtig Jahr

Solch ein Gewimmel möcht' ich stehn.

Zun Augenblicke dürft' ich sagen:

"Verweile doch! du bist so schön!

Es kann die Spur von meinen Erdetagen

Nicht in Äonen untergehn!"

Im Vorgefühl von solchem hohen Glück

Geniess' ich jetzt den höchsten Augenblick.

—*Goethe.*

大悲の攝取

常盤大定

佛ある時王舍城に乞食し玉へる折の事なり、爾の時城中に糞穢を除く人ありて、其名尼提と呼ばれぬ、長髪蓬の如く亂れ、垢膩不淨にして、着けぬる衣裳悉く弊壞し、宿世いかなる惡業をか爲しにけん、背に糞坑を負ひ、遠く棄て去らんとせる時しも、路に佛を見、尊顏を瞻仰すれは大海を觀るが如く、一尋の圓光身を莊嚴し玉ひ、眞金聚の如く諸の垢穢なし、着くる所の袈裟は赤栴檀の如く、また寶樓の如く、之を觀るに厭く事なし、佛世尊を見たてまつれば、畜生だもまた眼根悅樂す、ましてや人の歡喜如何ばかりぞ、尼提無上調御の諸根寂定にして、圍繞侍從せる比丘等の根散亂せさるを見て、愛敬の念燃ゆるが爲めなり、既に佛を見已りて自ら臭穢にして背に糞坑を負へるを鄙しみ、此身いかてか佛を見んやとて、廻趣道を異にして去り、心に愁惱を懷き、つく〳〵思ふやふ、我先世に福業を造らす、惡に率かれ、今此苦を受く、我は今斯の下賤の業を愁へざるも、衆人皆佛前に到るを得て、我のみ獨り往くを得ざるを思へば、懊惱さながら胸を燋くにも似たるかな、斯の如く思惟し已りて、異巷より去り、遠く避けてまた佛を見たてまつらず、然れど大悲平等の佛世尊は、彼に隨逐して捨てす、即ち彼巷に現はれて尼提の前に立ち玉ふ、尼提見已りて復た驚怖を生じ、自ら責むらく、我は甚た薄福にして、諸佛は香潔なり、我如何そ此極穢を以て、佛に逼近するを得へき、若し近つかば罪業益々深重を加へん、先世の惡業我をしてのち爾らしむと、更に佛を捨てゝ異巷に入れば、如來復彼巷にまします、尼提且つ怪み、且つ惱み、復自ら思ふ、世尊は是人天の上にあり、我は是衆生の下にあり、如何ぞ此臭穢を以て世尊に近かんと、便ち廻避して異巷に入れば、世尊また先づ彼に至りて立ち玉ふ、既に佛を觀已りて暫耻却行すれば、糞坑壁を撞きて即ち碎壞し、糞汁流灌して衣服澆汚す、慙愧懊惱、顏色變異して、自ら念すらく、先きには臭穢なりといへど、猶坑の遮るあるを、今は坑すら壞れて穢惡露現す、甚だ慙耻すべしと、されど隘巷中に於て、藏避する所なきを以て、合掌して白さく、願はくば少しく途を開きて我身を容し玉へ、爾の時如來大悲心に薰じ、和顏悅色尼提の前に到り、柔軟の雷音を以て、尼提の名を嘸び玉ふ、尼提聞き已りて思ふ、佛は是三界の至尊なり、豈我の如き鄙賤のものゝ名を喚ぶべけん、必ずや餘人の我と同字のものありて、佛彼を喚び玉ふに非るなからんや、乃ち周章四顧す、佛心平等にして愛憎を斷ち、尼提をして勇悍の心を生ぜしめんが爲、手を擧げて彼尼提を招き玉ふ、其指纖長にして爪は赤銅に似、掌は蓮華の如くにて柔軟淨潔なり、尼提目を擧げて佛を覩、唯合掌するのみ、佛尼提に告げ玉ふ、汝今に於て能く出家するや不や、時に尼提聞き已りて、心に歡喜を生じ、即ち偈を以て白す、

穢多のこの身のいかてかは　ひじりの群に入るべしや
若し我をしもあはれみて　出家をゆるしたまひなば
これや地獄の底にすむ　苦惱の人の手をとりて
天の羽衣きるといふ　天に上げまするものにこそ

佛尼提に告げ玉ふ、汝今是の如く思惟すべからず、我必ずしも賢王等を撰擇せずして、亦下賤優波離等を度せり、我は大富長者の須達多等の爲のみにせず、亦貧窮の須賴多等を度せり、我は大智の舍利弗の爲のにみせず、亦鈍根の周利槃特等の爲にせり、我は少欲知足の摩河迦葉の爲のみにせず、亦多欲の婆難陀等の爲にせり、我は耆舊宿德の優樓頻螺迦葉の爲のみにせず、亦幼稚の須陀耶等の爲にせり、我は憍慢の婆迦賴等の爲のみにせず、亦極惡の鴦掘摩羅手に劍を捉る者の爲にせり、我は多智男子の爲のみに說法せず、亦淺智女人の爲にも說法せり、我は出家の衆の爲に眞濟を作すのみにあらず、亦極惡在家の人の爲にも說法せり、我は少欲の人の爲にのみ說法せず、亦在家の幼子の五欲を恣にするものゝ爲にも四眞諦を說けり、我は衆務を放捨せる逋多梨の爲にのみ說かず、亦國事を經理し諸の世務多き頻婆娑羅王等の爲にも說けり、我は斷酒の人のみの爲に說かず、亦極醉の郁伽等の爲にも說て道跡を得しめたり、我は定を修するを樂む離越等の爲にのみ生死を離るゝを說かず、亦子を失て狂亂せる婆私吒等の爲にも說けり、我は賢德優婆塞に等しき種中に生ぜるものゝ爲に說法するのみならず、亦邪見の弟子阿須拔提等の爲にも說けり、我は盛壯なる嗔吒和羅の爲にのみ說法せず、亦衰老の羅拘羅等の爲に說けり、我は宿舊の婆拘羅の爲にのみ羅漢を得るを說かず、亦七歲の沙彌須陀延の爲に說て羅漢を得しめたり、我は滿願子等の大論、牛王の辯才無盡なるものゝ爲にのみ說かず、亦淺智の逆摩地那比丘尼の爲に說て深智を得て能く大丈夫の問難を解せしめたり我は方貴大王の夫人彌扳提等の爲に說て道果を得しめたるのみならず、亦下賤の僮使鳩熟多羅等の爲に說て道跡を得せしめたり、我は貞婦の毘舍佉の爲にのみ說かず、亦嬈女の蓮華等の爲にも說けり、我は大德辯才女人の瞿曇彌等の爲に說けるのみならず、亦七歲の沙彌尼至羅の能く外道を摧伏せるものゝ爲にも說けり、爾の時世尊偈を說て示すらく、

我說く法の中にては　たゞとく出家すべきのみ
甘露をうるは智にぞ由る　いかて種姓に因るべしや
貴きもはた賤しきも　身は共にこれ四大空
種姓はあだの差別なり　智なくんばまた何かせむ

尼提即ち佛の敎を奉じて、尋て便ち出家して阿羅漢を得たり、あはれ善根にして熟するあらば、復た逃避すと雖、如來

の大悲は攝取して遂に放捨し玉はざるなり、

これは是馬鳴菩薩の大莊嚴論經に見る所、佛陀平等の大悲を發揮して餘蘊なしといふべし、誰か之を讀みて春風面を拂ふが如き宏懷に打たれ恍として大我の中に沒入せんとの感を起さゞるものぞ、何ぞ又多言を敢てして、蛇足を添ふるの愚に出てん、唯一言すべきは尼提南傳にはスニータといひ、其出家せる時の歡喜の表白は南傳長老偈の中に存すること是のみ。

日曜講話

執持の解

近角常觀述

本日は執持の解といふ題を出して置きましたが、これは今迄佛語に親しみのない方には聊解し難い語である。親鸞上人の意を述べるのには適切であろうと思うたから特に此題を撰んだのである。今親鸞上人の意といふも、一の宗旨といふ樣に偏よつた意味でない、實に聖人の信仰の確固不動なる事を言ひ表はすには、執持の語か如何にも善いと思ふ。全体此文字は何處にあるのかといふと、餘り學問的ではあるが、阿彌陀經の中にある。其文を言つて見れは執持名號、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂等といふのである。此執持名號の名號といふのは、佛の御名で、極平易にいへば佛の御名を執り保つといふ意である。親鸞聖人は自己の眞面目を表はされた語の中に執の言は心堅牢にして移轉せざることをあらはし持の言は不散不失に名づく、とかういふ解釋である。此解釋は聖人か思ひ切つて自己の信仰を表はされたものである。佛の御名を持つ事、若は一日、若は二日、若は三日、乃至若は七日、一心にして亂れず、即ち二心なく眞實に佛の御名を執り保つといふが經文の大体の意である。今日は此意について御話して見ようと思ふ。

佛敎の上では此執の字を善惡兩意に用ひらるる、即ち執着とか安執といふ意味に用ひられ、物に拘泥して動かず、又間違うた事を堅く取つて動かぬといふ意味に用ひらるゝ場合か多い。今玆に言ふ執の意味は善き方に用ひらるゝ場合である。こゝか佛敎の上でも親鸞聖人の形式か違うて居る所である。實に物事に屈托せず流るゝか如く清き胸でなければならぬ、か、こゝに形式をかへて執の字を善き意味に取り、進むて大執持の見地に立て行く樣になれば少しも動かぬ、心の中に確信かあれば毫も動かぬ、聖人の眞面目は明らかにこの執持といふ意味に表はれて居る。執とは即ち確信不動を表はす字で、一旦確信不動の見地に立てば心堅牢而不二移轉一である、佛を深く内心に信ずれば如何なる手段を以て迫り來るも少しも動かない、これ最も妙味のある所である。次に持といふ意味は、一つのものをつかむてはなさぬ意で、聖人は不散不失といはれた所以である。一度佛陀を内心に持ち得たならば、もう永久に離るゝ事はないのである。これを以て見れば親鸞聖人の信仰は一度佛陀の大命の下に安心確執したならばそれでよいといふのである。此の大なる信仰をいひ表はす爲には、彼の善導大師の二河白道の喩か最も適切である。其喩の大意はこうである。

或人かあつて渺茫たる無人の曠野に出てゝ道に迷ひ行くべき方を知らず佇立して居ると、突然前方より數多の群賊干戈を以て迫りて來る、逃れんとして後ろを向けば、已に幾多の猛獸が牙を出して進むて來る、最早進む事も退く事も出來ず、止むを得ず他の方向に逃れんとすれば右の方には大河があつて激浪天を捲き、左の方には猛火炎々として地を燒く、爲に此人は強て逃れんとすれば水に溺るゝに非んば火に燒かれなければならぬ。又群賊猛獸は愈迫て來る、如何ともする事か出來ない。此時に不圖見れば河中四五寸の一條の細き道がある、之より外には道とてはない、如何せんと思うて居る中に後の方に人ありて呼ふて曰く、汝ろの道を進め必す死する事なしと、聞くや、其人は直ちに其路へ進みかくれば又向ふの岸より聲ありて呼むて曰く、汝一心正念にして直に來れ我れ能く汝を護らむと、其人益進むとすれば、學者、識者、宗敎家抔が各方面より此人を呼びかけて云ふには、汝は其樣な無望危險なる處に行く勿れ、これ決して汝の生命を得る道に非ずと其人思へらく、我此場に臨むで人に耳をかすべき猶豫なし、我活路は唯此四五寸の道なるのみと、他の幾多の勸めを顧みず、汝一心正念直ちに來れといふ呼聲に應じて、ずん〳〵進むて行く、此處か非常に大切な所である。確信して進むといふ事は一分行つて三分もとり、三分行て五分もどるといふ樣な手弱い意味ではない、一直線に進むのである、迷の淵に沈める人が一度信ずへき道を得たならば、其道に進むのに猶豫のあろう筈はない。此喩の要點は其人の初めに取りたる一方針に眞一文字に進みゆけといふのである。實に此の意味は吾人か信仰の内容をあばき出したものである、吾人の心は常に怒の火を以て燃えつゝある。譬喩經には人の心は醉象に迫はるゝか如しといふてあるが、如何にもそうである。犀狼の如き慾心は常に内心に起り來り、煩惱の風波は絶ゆる間なく、日夜惡事をのみ行ひつゝある。前には群賊の迫り來るあり、後には犀狼の追ひ來るとは實によく人生の有樣を說いたものである。火の川は吾人の瞋恚憤怒の心を顯はしたものである。如何に親しき朋友の間でも如何に平和なる家庭の間でも一旦怒の心が起つたならば火が紙を燒く如く功德の寶財を燒くものである。又水の河は愛慾の心の深さを示したものであ

る、愛慾の心に迷ふた時には水に濡らされたる衣の如くである。吾人は常に瞋恚、愚痴、貪慾の爲に追ひつめられて一の活路なく、少しも餘裕がない。然し此窮地にありて唯一つの活路は我々の信仰の對象即ち佛陀の救濟の大なる力である、內心に感得する佛陀の光明である、これ即ち水火の河の間に開かれたる活路である。而して東岸より進め〳〵との給ふ處の聲はこれ釋尊である、三千年の昔の此聲は今も猶響いて居る、然して永劫響いて止まぬのである。又西岸より聞ゆる聲はこれ吾人が信仰の對象なる佛陀の呼聲である、我能く汝を護らん水火のうちに墮せん事を恐れず、一心正念にして直ちに來れといふ呼聲はこれ吾人が信仰の活路である。此活路を特に白道といはれたのは味のある處である、白とは即ち潔きを顯はす意味である。此活路こそ實に人生差別の人間界より、西方佛陀の絕對界に達して居るのである。然し吾人內心の煩惱の興盛なる爲に暫く杜絕せられた樣に感する場合もある。實際世間には異學、異見、別解、別行の人が、眞個に求道の人に對して幾多の誘惑を與ふるのである。然し斯樣なものには毫も耳を傾くなといふのである、今の喩は實に巧を極めたものである。其人の進める僅か四五寸の道は必すしも人生の初から終りまでつき通つて居る樣には見えない、兩方の水火は交々足下に迫り來る、茲に於て其人は唯救濟の聲を信するのみである。吾人が實際上の經驗にも殆んと信仰を燒き盡す樣な怒の火、慾望の水にせめらるゝ事かある。然れとも白道は決してこれか爲に破壞せらるゝ事はない、水火さへ去れは、白道は再び顯はれて依然舊の如くである。たとひ水火は幾度迫るとも白道は決して侵さるゝものでない。此偉大なる確信が即ち執持の眞意である、此確信が即ち佛陀の永久不變の大地盤である。親鸞聖人の信仰の如何に堅固なりしかは今の執持の語によりて明かに知らるる。

然しそれ丈では少し諸君に御わかりにくい點かあろうと思ふ、心を他の方に轉せず眞直に進むといへば、無理にそういふ風におしつけるのかといふに決してそうでない。始には一寸そういふ考も起るけれとも、それでは到底駄目なのである、其樣にりきむだとて決して進める譯ではない、唯此方の足ばかりに力を入れても地盤が確として居らねば思ひ切りて踏み出すことが出來ぬ、其堅固なる地盤とは名號である、又信仰を攫まむと試みるも手ばかり握りしめても握るべき物がなければならぬ。其物は名號である依て聖人は名號を執持しにきらなければならぬといはれたのである名號とは前にもいふ如く佛の名、即佛の偉大なる人格佛の勝れたる德を表はしたものである。言ひ換ゆれは佛の偉大なる力佛の廣大なる慈悲心である。名號を保つといふはその名は佛の力を意味するので、その大なる力の上に自分を安住せしむるのが即ち佛の名を保つ所以てある。一且其地盤に安住しながら其地盤の確なる事を疑へば最早しつかりと立つ事か出來ぬ、恰も浮木の樣なものてある、人生唯一のにぎるべきものは佛の慈悲佛の力佛の願のみてある。茲に初めて人生の上に活路か生ずる。かうなれば人生上に起て來る總ての問題を解決するのは甚だ簡單なものてある。然れは慈悲とは何であるかといへば、東西兩岸の佛の御聲である、佛の偉大なる救濟が冥々のうちに與へらるゝ確信である、此確信は即ち我々が床といふ地盤の上におちついて座りて居ると同じ事である。これ地盤の上に確乎として安心して座る事か出來るのてある、これ自分が座はらむとして坐るのでなく確かな爲に坐らずには居られぬのである、これ自分がにぎらんとしてにぎるのではなく、にぎらずにはおられないのである、自ら此境遇に至るのである。信仰は求めんとして得らるゝものではなく佛陀によつて與へらるるものである。親鸞聖人の執持名號の味も、これで益明かになつて來る。今迄は執持の意味を唯語の上から話したのてあるが、これより其意味を人生の總の經驗にひきもどして御話しよう。名號を執持するといふても唯名號を口に稱へるのみではない、佛陀の大なる救濟を確信して若は一日、若二日、若三日、乃至一生一心にして亂れずば、命終の時に臨むとも心顚倒せすして佛の國に趣くのである。これが親鸞上人の信仰である。この味は諸君に是非とも味て戴かねばならぬ、人生の問題は此地盤の上に立たざれば到底解決する事は出來ない世の中の事は實に變化移動常なき者てある、此變移混亂の間に立ちて常住の道を見出さなければならぬのてある。そこて私は斯くの如く佛の力佛の慈愛といふ事を口を極めていふのてある。此力とか慈悲とかいふものを始の間は極單純なる概念の如く思ふけれども、これは非常なる誤てある。人生の事は決して期す可からざるものてある唯一期すべきものは佛の力である。此力の中に自分を全く投入してしまうのてある。かゝる事を唯一生の上より打算すれば殆ど無謀の樣に見える成程人生の狂瀾怒濤の間に立ちて自己を顧みぬといふは一見甚だ無謀の樣てある。之をいふは甚だ獨斷の樣てあるか、決して誤のない事は、私の僅かなる過去の經驗でも充分證明する事が出來る。人生は實に先申した樣に無人空曠の野に飛び出したる人の如くてある、そこに唯一のよるべき佛の力を見出してゆるまず、たゆまず一心に進むこれ程愉快な事はないかくいへば未だ經驗なき人は人生總ての誘惑や困難に抵抗して行かねばならぬ樣に考へるが、それは自力の信仰といふものて到底我々の及ぶ處てないと聖人も仰せられたのてある。自力の信仰は強い彈機を弱い手の力で壓へて居る樣なものて一寸手を離す時は忽ち跳ね歸るのてある。何しても我々は他力の根機てある。然し一度他力の救濟により佛の道に乘托したならば、安心の地に住し內心自ら平和を感ずるのは即信心歡喜の味てある。かうなれば自身の罪惡を自覺する每に益々

佛の救濟を思ひ、不如意の事に相遇する毎に愈佛の慈愛を感じつゝ進ましてもろうので、この永久の安慰永久の平和は決して自分の力ではないのである。これは疑ふと思ふても疑へず、感ぜずに居ろうと思ふても感ぜずには居られぬ。實に他力の信仰は自分が彼是と計らはずとも自然に行くべき處に行くを得るのである。次に一心不亂とある、一心とは無二眞實の意である。佛の眞心である。其唯一の佛の眞心が自分の內心に自ら滾々と湧き出づる、親の眞心が子に及ぶ、佛の眞心が吾人の內心に受け取らるゝ、これ即ち執持名號一心不亂の意である。これは丁度大海の中にある孤島が常に怒濤に打ち寄せらるゝも毫も犯さる事なく、しつかりして居るのと同じ事である、即ち其孤嶋は一見浮嶋の如く見ゆるも實は海底の大なる地盤に築かれて居るのである、毫も不思議はない。浮嶋の如き吾人と雖も佛の大地盤に立つた以上は、世間の風波如何に烈しく起るとも少しも動かない。此地盤に立つて見れば、政治、文學、宗教、軍人其他實業總ての事皆これ佛の使命であるを感せらるゝ。然らば此使命を果すのは即ち佛の意思にもかなひ、又人類の爲め同胞の爲である。茲に至れば吾人は始めて靈界の佛と一致するのである。一人の人のする事が即天下の人々のする事であり、個人を善くする事は即ち社會全體を善くする所以である、信仰を一人に談ずる事は是れ天下萬民に談する事である。若し此使命を自覺せずんば堂々たる政治家の言行も一少些事に過ぎぬのである。然し世間の事は大小に係らず障碍は必ず起つて來るけれども、各自の信ずる使命を體して直進せば、たとひ己は自覺せざるも必ず彼岸に到着する事は明らかである。我々は常に水火に心を奪はれながらも唯一佛を念じて進て行けば善いのである。是迄佛教では人生に屈托せず抔といつては居るが、人生に屈托するのは我々の性ゆへ是れ止むを得ぬ次第で、これ吾人が本來の面目である。然も其亂れたる中に唯一つ動かぬものを以て進み行くのである。人生を信仰の上より味ひながら國家社會の中に生活し各自行くへき道を行きつゝ、常に偉大なる力を感じさせて貰うのである。私始め毎日水火の爲にせめられては居るが、信仰の一道に立ちもどりて唯それを生命としそこに安住して日暮をさして貰うて居る事を深く喜むで居る。夫故に今日は執持の解といふ題を出して親鸞聖人の信仰を述べた次第である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

最大の不幸

太田秀穂

青年淑女諸君予は今日に至るまで種々の不幸に接せしが、是等の經驗よりして單刀直入心情を表白せんとす。

人生幸多きか將た又不幸多きかは、要するに各人の信念に關する問題にして、今急に斷言すべきにあらざるなり。或は厭世と云ひ、或は樂天と云ひ、或は苦樂併進と云ひ、各學理上主張あるべし。然れども如何なる樂天論者と雖も、全く苦を感ぜざるものはなく、殊に時勢の進歩するに從ひ痛苦を感すべき諸原因の增加するに似たり。

人生不幸の種類多しと雖も、之を分ては自然的あり、人爲的あり、自己より來るものあり、他より來るものあり。而して衣食の憂の如き蓋し急の急なるものなるべし、貧苦の悲痛なるは啻に自己の衣食の欠乏にあらずして、自己の愛する父母妻子の衣食の欠乏なり、形の上の貧乏に止まらずして、思想上の卑屈を來すことにあり。昔蘇秦學窓より歸る、妻子兄弟之を敬せず。六國の印綬を帶びて歸るに方てや、之を迎ふる効外三十里、誠に季子の位貴くして財富めるを以てなり。故福澤先生も嘗て諸生を招き述べて云ふ、現在子弟の關係あるも財の多少を以て諸生を上下せんとするものもなきにあらずとせば、況して一般世俗社會の人情なるもの推して知るべしと。實に財なくば衣食なく、朋友なし、特に近來は昔日よりも生活の度高きが故に生活の困難名狀すべからず、地方小學教員の如きは師範學校を卒業してより、十年にして得るところの收入、月二十四金を超ゆるもの少し。此少許を以て妻子を養育し、所屬人民と交際を全くせんとす、その困難なる推察するにあまりあり。警察官等につきて見るも、米國巡査の初級年額七百弗の如きは、我國にては夢想だも及ばざるところにして、一般の平均は諸種の收入を合するも尙ほ月給十四五圓を出てされば、その生活內部の狀態は實に諸君の想像外なりと云ふべし。東京に於ける活版職工の老練なるものは日給七十錢なりとの事なるが、一日十二時間以上勞働し、十年以上勤續にして斯の如し、社會の大問題に非ずして何ぞや、農業の如きは至て薄利にして、土地に附着せる勞働者に過きざるが、諸稅增加せば或場合には寧ろ田畠を放棄せんとするに至らん。以上述べる如く平時の場合に於て然りとせば、万一の事ありて事業に失敗し、家產を蕩盡するが如きあらば、その痛苦の大なるや言を俟たず。諸君は借財したることなかるべきを以て、此方面に對し同情を得る事難かるべきも、「シエークスピヤ」の云ふ如く、金は必ず借るなかれ、世人或は二三圓の爲に縊死せし人を嘲ることありと雖も、その衷情あはれむべし。予輩も嘗て一家の破れんとするを目擊

したるものなるが、誠に人の家の倒れんとする時の悲は尋常の事に非ず。彼の涙を拭ふて麵麭を味ひたるものにあらずんば、未た共に語るに足らざるなり。

然しながら、貧なるものは必ずしも消極的なるのみにはあらず。貧中自から亦樂むべき餘地なきに非ず。孔子も貧にして道を樂むと云へり。聖書にも爭ふて肉を食ふよりは、和して野菜を食するはまされりと云ふにあらずや。凡そ人の貧なるや他に對しては推察心深く人も亦同情を與ふるものなれば、苟くも貧の何たるを自覺せば、貧は却て我に益を與へ易し。貧にして道に安ずるよりは、富んで驕らざるは更に難し尚ほ世の實際につきて考ふるに、世の中に餓死する人は實に少くして、却て飽食の結果死するもの幾十倍なるやを知らず。夫婦の如きも貧時は却て夕涼かやり火の前に嘻々として酌を交ゆるが如きことあるも、富むに從て家妻の空閨に泣くか如きことなきを保せず。之を要するに貧は必ずしも我敵にはあらざるなり。

人生病なきを大なる富となす。彼の常に腦を患へ、或は肺を病むものゝ如き、若くは終生不治の床につくものゝ如き、その不幸大なりと云ふべし。世人或は自分が死にしよりは尚ほつらかりきと云ふもあれども、是は形容詞に過ぎざるなり。凡そ我ありて天地あり、自然あり、人情あり、我なくば妻子兄弟何するものぞ、諸君の多くは平生より健康なるを以て、或は自から深く考究せざるならんが、人の病に陷りしときの如く、無勢力なるものなし。然れども病氣の中から慰むることを得ざるにはあらず、世人の病を恐るゝは自衛上然るべき事ならんも、病氣は人の思惟する如く苦痛にあらず、且つ苦痛甚しきは知覺を失ふべし、苦痛の感覺は全く鈍なるに至る。長年月病床にあるか如きは不幸なれども、長病の結果は或は精神力加はり、或は愛情を增すか如きこと少からず。生理學の說明するところによれば、現に肺病患者の如きは生殖力强しと云ふにあらずや。且つ古來病者若くは不具者となりしが爲に不朽の盛名を垂れしものは少からず。左丘明の明を失ひし如き、司馬遷の刑せられしが如きは、寧ろ是等の人のみならず後世人の幸となりしや疑なしと云ふべし。

家庭の平和を得ざるか爲に苦悶するは人に免れざるところなり。三軍の師は奪ふべし、一婦人の志は奪ふべからず。今日統計書を見るに、家庭の不和の爲に自殺するもの十中七八を占む、亦酸なりと云ふべし。然れども熟考するに今日我家庭の眞に和樂せんとは甚だ難し。父は蓄妾を以て善事とせさるも必ずしも惡事とせざるに、子は之に反し、大なる罪惡と思考するが如きとあり。是等は寧ろ父に顧みて子自身に於て戒むべし。現今は男女の敎育盛大を加へ、兄弟姉妹各鄕貫をはなれて學に從ふものなるが、その結果は父母も兄弟姉妹も後に至りて苦むことあるべし。然も家庭内の事につき忍耐し得る人は、乃ち天下の事に忍耐し得る人なり。家庭は常に甘樂なるべしと豫定するは、女學生等の空想にして、予は明らかに家庭を以て義務の練習場なりと信ずるものなり。

次に家庭内に起る事につき悲むべきもの少からず、或は父母を失ひ、或は妻子と死別す。斯の如きは自然の事にして、止むべからずとは云ひ、人の涙を催さゝるを得ざるところなり、加賀千代は亡兒を憶ふて「蜻蛉釣り今日は何處までいんだやら」と哭したりと云ふが、子供に別れし痛苦は十年二十年にして忘るべからず。又妻に別るゝが如きその悲痛は名狀すべからず、英雄的思想より考ふれば、もとより取るに足らざれ共、人情より見れば斯の如き悲痛の事は少し。共に讀みし。共に植えし花、悉く紀念となりて我心をいたましむるのみ本妻を失ひし後の生活の不自由、寢食の不愉快の如きは些少なるものにして、唯肉心共に一体なりしものが忽然として相別るゝとなれば、恰かも自己の心腸の寸斷せられし如く感ずるは止むを得ずと云ふべし。予も家妻と結婚後十一ヶ月にして此悲境に接し、爾來獨居すること玆に三歲、今日になりて考ふれば、不幸は不幸としても、自分は之によりて學びたるところ少からず。患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來らせざるものなりとのボーロの言の味あるを熟知せり。釋迦牟尼は一切女人是我姉妹なりと述べられたるが、予は今日に於ては女人に對する愛は、昔日よりも純白なることを斷じ得るに至れり。殊に懷胎の婦人に對しては予は過ふ毎に知ると知らざるとを問はず、その人の無事を祈て止まざるなり。

自己の願望の達せられざることは、男子にとりては悲痛なること勿論なり。自己の考は誤れるにあらざるも、時勢に比して進み過ぐるが爲に、朋友知人より棄てらるゝが如きは少からず。社會なるものは多くは盲者の集合体なれば、社會に成功することは必ずしも人の價値を示すに足らざるなり。之を例示せんに賀易商等にして先驅するものは多くは失敗し、第二流第三流の人にして成功するが如し。何れの時代に於ても改革者は必ずしも改革の結果を拾ふ能はざるは、陳勝吳廣死して劉項京に入るが如し。今日官吏の如きは格別の成功なけれど、假りに職務俸給等の進歩を以て成功とせば、今日の成功は無意味に近き事なきにあらず。或人の言に役人として立身せんことを思はゞ怠るなかれ、敢て勉むるなかれ、敢て自分の意を用ゆるなかれ、大官酒を好まじ、酒は百樂の長なる如く思ふべし、大官喫烟を嫌はゞ、すべからく煙毒を唱ふべしと。昔は柳下惠は進めらるゝも平然たり、退けらるゝも平然たり、誠に道を以てせば何處にゆくとして衝突せざらんや。文學者小說家の如きも第一流となりて名著のみを出さんとすれば、或は飢餓に陷るべし。大著述大事業は多くは當世に容れられざるを以て見れば、時人の贊否如何の如き何ぞ深

く憂ふるに足らん。容れられずして却て君子を見るにあらずや。然らば何を以て人生の最大不幸となすか、凡そ苦痛ありて快味なく、唯だ是れ消極的なるは何なるか、曰く。目的なく、希望なく、信念なき生活なり。朝に道をきかば夕に死すとも可なりと云は誠に道に入るの樂くして死尚ほ辭せざるものあればなり、總て世の中に一大理想の溢るゝを知りて、惠の露のうちの人たるを知らば、此世界の事は貧富貴賤皆我に利あらざるはなし。若し此世の意味を知らずんは、不平の原因は如何なる時にも絶ゆるの時なく、己れ自から己を惡まん故に予の考を以てすれば、最も不幸中の不幸なる人は、嘗て一度も不幸を味はざりし人。事物の善方面を見る事能はずして、惡方面のみを注意する人。境遇を利用せずして、害用する人なるべし。昔人は一難來る毎に神佛に感謝したりと云へり。若し宇宙に一大敎師ありとせば、人は決して無意味に苦むとなかるべし。困苦は良師友なり、世界は大學校なり。願くは青年淑女諸君相互につとめて此世の眞義を知るとに勉めんかな。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

毎月敎壇

佛敎之眞髓

近角常觀講

序論

二、實驗的見地に立ちて釋尊已後各宗派の信仰に同情(Sympathise)し含蓄的批判(Immanent critic)の方法を以て長き歷史を貫ける佛敎の生命を攫み出すこと。

此第二項に就きて詳論せむに、吾人がこの講述に於て最も特徵とする所は實驗的見地に立ちて講述する點である。抑〻實驗と云へることは人生に於て憂悲苦惱、或は歡喜踊躍等の實際的實感を以て宗敎の信仰を經驗することである。故に苟も嚴格なる意味に於て宗敎とせらるゝものならば、實驗的ならざるものはない筈である。故にことごとしく實驗的など云へる言語を持ち出すべき必要はない筈なれども、現今の佛敎界の有樣では之を出さねばならぬ程、宗敎の眞面目が埋沒されて居るのは實に殘念の事である。即ち現今佛敎の講述は書物にあらはれてある文句を訓詁的に解釋するにあらずんば、其敎義を哲學的組織的に取り纏めることになつて居る。これ

では一向宗敎の生命を見出すことは出來ぬ。又ある者は實驗的に講述するといふことは、說敎でもするやうに感情的に話しすることのやうに思ふてゐる弊がある。如何程感情的にいへはとて其實自己の內心の實驗に觸れぬ事をいふならば、恰も役者の言語の如きもので或は詩的といふことは出來ても生命ある宗敎といふことは出來ぬ。實驗と云へる眞意義は聖敎若は敎義を理論的若は感情的に反覆することにあらずして、直接に自己が人生の上に宗敎の信仰を味ひたる事である。依て眞實信仰を實驗したるものにあらずんば、宗敎の事は說くべからさる筈である。然るに從來一般の講述なるものは訓詁的解釋若は哲學的組織を並べ立てることを以て、講述と心得て居る。全体佛敎の哲學を書きたる論部の如き敎義でも必ず其哲學に伴ひたる信仰なるものが存するゆゑ、之を講述する時には必ず實驗の見地より見ねばならぬ。されど論部の如きは哲學的研究を主としたるものゆゑに、たとへ實驗的見地に立ちて講ぜずとも大なる間違はなかるべきも苟も何宗の敎義とか、何宗の祖師とかを研究せむとするには是非共實驗的見地に立たねは了解出來るべき筈がない。殊に鎌倉時代に起れる各宗の如きは、多くは煩瑣なる哲學的部分を有せざる純粹なる實驗的宗敎である。然るに現時は是等の宗旨の敎義若くは聖敎を講述するに當りて毫も實驗的見地に立たずして、全く理論的甚しきは諍論的に講述しつゝある次第である。これ頗る不法なる方法にして到底宗祖の眞意を理解することは出來ぬ。各宗の宗乘の研究に於ては確に此弊害に陷りつゝあることを斷言するに憚らない。

抑〻從來宗派の開闢といふをは、新に一個の敎義を組織的に組み立ることのやうに考へられてゐる、即ち敎相判釋といへることを一切經の分類でもなすことの意味に取りて、之が出來れば一の宗旨が出來た事のやうに考へてゐる。これは皆大なる誤りである。全体宗旨の開闢と云へることを敎義を作ることゝ考へてゐるのが抑〻の誤りである。一宗の開闢といへることは從來行はれつゝありし宗旨が全く信仰の活ける泉を失ひて徒に敎義の殘骸、儀式の型のみとなりて人生上に於て何等の救濟をも持ち來さぬやうになりたる時、時勢の要求に應じて恰も一偉人が直接に人生の根本に於て深淵なる宗敎的實驗を試み其人の胸中に深く穿たれたる信仰の源泉が迸り出でたのが、即ち宗旨を開闢したのである。故に其人が言ふ所、行ふ所、其淸らかなる信仰の水を撒き散らして、新たなる宗旨が自ら形つくらゝ次第である。而して敎義なるものは其信仰の水が流れたる川の如きものである。故に敎義には必ず之に充されたる信仰の水が伴はざれば、宗敎として何の價値もない。然るに年所久しきを經るときは又此敎義が恰も水なき溝の如く乾燥無味なる

形骸となる次第である。今日多くの人の説く教義なるものは此形骸をつかんで居るものが多いやうである。彼の教相判釋の如きは決して一切經を分類すると云へるが如き學問的の事ではない。これまた其祖師たる人が新しく實驗したる見地に從て釋尊の説教若くは其人已前に出來てある諸宗の實驗を取り纏め或は且つ其發展の次第を跡つけたるものである。故に天台若くは眞言の如き實驗に伴ふに深遠なる哲學的組織を以てしたる宗旨の教相判釋は從て複雜なる哲學的組織をなすものである。世人は教相判釋といへば直に天台の五時八教を以て摸範的なるものと考ふる爲め、知らず識らず教相判釋を哲學的分類の如く誤解したるものであらふ。抑々教相判釋が各其宗に於ける實驗的立場より佛教全体の實驗を取り纏めたものであることは、龍樹の難行道易行道といへる取り纏めやうが、最も適切なる實例である。即ち陸路の步行は苦しくして、水道の乘船は樂しと云へるか如き頗る實驗的の分け方である。聖道淨道の分け方の如きも同樣である。親鸞聖人の竪出竪超、横出横超の二雙四重の教判の如きも全く實驗的の分類である。私は有躰に白狀するに曾て此教判を以て頗る拙劣なる分類と考へた時があつた、乃ち此の教判を哲學的分類と考へたからである。若し哲學的分類といへる見地より此教判を眺むる時は如何程辯護しても決して巧妙とは稱せられぬ。併し實驗的見地より此教判を見る時は實にいふべからざる妙味の存することを發見する。即ち此世界に於て凡夫より聖者に上るは如何にも竪といふべきである。此世界より極樂へ行くといふとは如何にも横である。而るに竪てに悟る中に三僧祇百大劫の時を經て漸々部分的に出てゆく小乘權大乘と即身成佛、即身是佛と頓に超へて悟る實大乘との二た通りあるが故に竪出竪超と之を細分し、又横に淨土へ往生する中にも念佛修行の多少に依て部分的に往生する西山鎭西と、信心の一念に往生する資格の定まる眞宗とがあるゆゑに横出横超と細分したるものである。如何にも竪といひ横といひ、出と云ひ超といひ之を實驗の見地より味ふて見れば、實に無量の味のある分類である。かく教判なるものは其宗其宗の實驗の上より纏めたものである。故に禪宗の如き不立文字の宗旨には教判なる者は勿論見出す事が出來ない。如斯教判なるものを各宗の實驗の立ち場より一代教若くは其宗旨以前の實驗を取り纏めた事とみれば、新たなる實驗ありて始めて教相判釋が出來たのである。言をかへて云へば宗旨が出來てから教相判釋が伴ふて來たとのである。決して教相判釋が出來て始めて宗旨が出來るなどと云ふことはない。其上教相判釋を以て一代教の哲學的分類の如く思ふは全然誤りである。故に予は實驗的見地より各宗派を見ねばならぬと主張する所以である。

偖如斯實驗的見地に立ちて各宗の實驗を取り扱はんとするに際して、此に一つ斷りて置ねばならぬ問題がある。抑々實驗といへることは上にも云へる如く、自己が人生の上に直に實驗した事である。故に實驗といふことは言を換ふれば信仰と云へることである。而して人は同時に色々の信仰を一人にして有することを得るや否やと云へる問題がある。例せば一人にして眞宗をも信仰し同時に禪宗をも信仰すると云ふことが出來るか否やと云ふことである。若し之が出來ねば實驗の立場で各宗を取り扱ふと云ふことは出來べからざるとである。今此疑問に答ふるに吾人は飽まで信仰は唯一の實驗たるべきことを主張する。全體信仰なるものは或場合に於て內心の極所まで切りつめた時に獲得するものである。例ば火藥が燃燒點まで熱せられた時に點火されるやうなものである。既に一たび信仰を獲得したる時は、又再び他の信仰を得ると云ふ譯にはいかぬ。何となれば一旦信仰を得たる以上は既に內心の極所に達したるゆゑ、決して第二の信仰が攫まるゝ筈がない。即ち第一の信仰だにあれば第二の信仰の必要がない。一旦滿腹したる人は他の物を容るゝ餘地がない。一たび燃燒したる火藥に再び點火すべき必要がない。若し假りに再び點火し得べしとすれば實は第一の信仰が眞實のものでなかつたと云ふとである。如斯信仰は唯一のものとすれば此講義に於て如何にして各宗の信仰を實驗的に取扱ふかと云へる疑問がある。此に於て各宗の信仰は結局同一であるか否やと云へる問題に逢着する次第である。予を以て之を觀るに各宗とも信仰の結果は同一なるべしと推測する次第である。只其教義の形式と從て之に入るべき道行とは各宗其趣を異にするのである。故に一人の人が兩方の道行を踏むことが出來ねども、すでに或道を取りて其結局に達したる人は自己の實驗を本として他の道を行きたる味もかくやあるらむと感ずることが出來る。故に其意味をあらはす爲めに、同情(Sympathise)するといふ言葉を用ゐたる次第である。

如斯各宗の信仰に同情して之を味ふは可なりとするも、如何にして其等の各宗の間に聯路を保つべきや。此に於て含有的批判(Immanent critic)の方法を取らむと欲する次第である。即ち自分自身の立場より他を評するときは、自己の信仰を以て他を貶することゝなる。故に他の信仰を見るには其人若くは其時代の立ち場に立ちて批判することゝとする。之をば即ち含有的の批判と名くるのである。倒せば奈良朝の佛教を見るときは吾人が身を奈良朝時代にれきて、成る程如此草創の際には如此形式の佛教ならざるべからずと批判することである。又平安朝の佛教を見ても單に後世の見解よりして一概に現世祈禱の迷信佛教なりと退け去るが如きは頗る不都合である。彼時代の信仰を了解するには身を彼時代に處して當時の如き諸種の修行に於て佛の威力を感じたる時代には、如此信仰もあるべき事を同情する次第である。かく其人其時代に

於ける立場に立ちて批判する時は、其等の各時代若くは各宗の間に圓滿なる聯路を見出すことが出來るのである。即ち平安朝を作り出すには是れ奈良朝がなければならず、鎌倉時代を作り出すには是非平安朝を要する事となる。要するに佛教の長き歴史それ自身か決して無意味なる教理の雜然と集りたるものにあらで、渾然たる唯一の生命ある歴史である。其生命とは全体の歴史を貫ける涅槃の實驗、菩提の妙果である。

以上述べ來りたるか如き實驗的見地に立ち、含蓄的批判の方法を以て、此講演を始めむとするに際して今一例を擧けて其趣を示さんと思ふ。乃ち涅槃經に有名なる五味の譬がある。曰く、善男子たとへば牛より乳を出す、乳より酪を出す酪より生蘇を出す、生蘇より熟蘇を出す、熟蘇より醍醐を出す、醍醐無上なり。もし服することあるものは衆病みなのこる。所有のもろ〳〵のくすりは悉く其中に入るか如し。善男子佛もまたかくの如し。佛より十二部經をいたす、十二部經より修多羅をいたす、修多羅より方等經をいたす、方等經より般若波羅密をいたす、般若波羅密より大涅槃をいたす、猶ほ醍醐の如し。醍醐とは佛性にたとふ。佛性はすなはちこれ如來なり。善男子かくかのごときの義のゆゑに、ときて、如來所有の功德无量无邊不可稱計とのたまへりと。此文字は古より天台宗に於ては所謂五時の說法に配當して、例の教相判釋の材料の一に供せられてある。されど此文字を味ふて見るに、從來佛教者が考へて居る樣な乾燥無味な喩ではない。此の譬喩の意義をよく味へは分かる、即ち牛より立派な乳が出る、即ち佛が衆生の苦しめるもの惱めるものに、譬喩やら因緣やら色々と佛の尊き教を說き玉へるところである。次に乳から酪を作る樣に、佛が到る所に說き證かせられた說法即ち十二部經を結集して四阿含經等の經文が出來た。其次には酪を製法して極、生ぶなクリームの樣な生蘇を作る樣に、阿含等の教が段々人の經驗の上にのぼりて佛の御力を感得し、佛の世界のことを書きあらはした方等經が出來た。次に其生ぶなクリームをよく練り上げて、よく醇熟したクリーム即熟蘇を作る樣に、諸佛淨土の靈界の中より、諸法の眞實の般若の教が出て來た。偖其熟蘇より最美はしき醍醐が出來上る樣に、般若眞空の道理より涅槃圓寂の教即涅槃經か出來上りた。其涅槃の悟りたるや、一切衆生が皆實驗し得べき境界にして、此境たるや、永久不滅の靈覺眞實の如來なり、其功德無量無邊にして計るべからずとの意味である。かく文句の通り味へは從來議論の絕えぬ小乘大乘の經文の出來た譯もよく分かる。從來天台宗で言ふた樣に佛が五時に大小乘の經文を直說せられたことを說きたのではあるまい富永仲基の言ふ樣なもので其位なら佛より十二部經を出す、佛より修多羅を出す、佛より方等を出すと云ふべき譯で、譬喩とも少々合ひ兼ねる。勿論佛の御說法が恐くば段々時機圓熟して御說きなされたのであるゆゑ、天台の樣にも云へば云へるなれど、何となく譬喩の味がなくなる。富永の云ふ如く天台大師は決して五時に配當して居らぬ。寧ろ漸次涅槃圓熟の教理の出てくることを書きたものと見て居たのであろう。是一つでも祖師たる人は實驗に富みた人であると云ふことは分かる。多くの宗旨にて祖師に續きて出て來る人が多くば祖師程の信仰や德がなくて、學問や才智が兎角働き過ぎて小刀細工をする故に宗教として味がなくなる。山から涌き出た水が溢れて自然に平原の間に河が出來たところは頗る趣があれど。根本の泉の方は打遣りて置きて石や瓦で川普請をしても整頓丈は出來るも一向趣味がなくる。天台宗などは最も此弊に陷りたものであろう。かく云へはとて吾人は富永が大乘佛典は後人が其上其上と段々作りて行つたものであると云ふ、加上說に贊成するものではない。近時、大乘非佛說など言ふことがよく流行するが、結局富永の思想の受賣に過ぎない樣である。此涅槃經の文句の如きも富永には所謂加上說を證明する材料にもなろうが。吾人の眼より見れば、洵に淺薄である、此喩に伴ふ實驗的の味が失はれて仕舞ふ。かの醍醐の美味はもと〳〵牛から出た乳の凝まりて出來た如く大涅槃の御教は佛の御說法の十二部經の精髓の塊であると云ふことになる。大乘非佛說どころではない、大乘は即佛教の眞髓であると云ふ意義になる。かく涅槃經の文を解釋すれば佛弟子が聞かれし說法も、四阿含に於ける苦集滅道の實驗も、諸佛淨土の靈界の境界も、般若眞空の理も、涅槃寂靜の妙味も各其立場に立ちて、之を生ける實驗として味ひ、且含蓄的に圓滿なる調和を得べきてある、是は吾人が研究法の一例を示したものである。

同一鹹味

百目木劍虹

見えざる力

一陽復り來て、靜に濕々たる春光を浴びつゝ、花笑ひ、鳥歌ひ、天地はさながら其勝利に誇らんとするが如く、麗はしく彩色したる自然の美は我等の前に現はれ來て、我等をしてしばし其影にあこがれしむ。而も我等は其何故なるを知らぬ。其美を謳ふ詩人も亦自ら其何故なるを說明し得ぬ。唯我等は之を感得するのである、爾り唯其見えざる力を感得するのである。

馬の蹄に踏みにじられたるあはれなる蘆は、一たび陽氣の誘ふに遇ひては、美くしき其笑顏は得意氣に習々たる春風の拂ふに任せて居る。されば陽氣とは何てある。太陽の光りかあらぬか。蘆は默して答へぬ。ろはもとより我等の絕えて知らざる所、而して此力言はず語らず、また見えざるの力である。只見えざれども、我等は天地の間微妙の力あり、靈界の

理思議すべからざる理の存するを信するのである。

世の人はいふ、不思議なるものを信ずるは、迷信なりと。不思議とは何であるか、曰く。説く能はざるもの、答ふる能はざるものを指すのである。之を信ずるを以て迷信とするならば、天に列なる星、地に駈ける獸、一として不思議ならざるものはない。世界は廣く、宇宙は大なり、せまき智識を以て之を知り盡さすとする、洵に大海の水を升量せんに譬へつべきものである。たとへば我等の智識範圍は絶海の孤島に似たらむか、たゞ我等の眼に映つるものは、渺茫として天に連なる水のみである。而して知らざるを以て不思議とし、而して迷信と呼ぶ。嗚呼迷信か、迷信か、信ぜざるものよりは遙かに幸である。疑ふものよりは、より多く幸である。我等は欺かれたるや否やを疑ふよりは、其儘信ずるのが幸である。醒めて後疑ふよりは、夢の中の樂みが幸ではあらぬかむかし雅典人なるある一人の發狂者が海上に浮びつゝある船舶を、皆自己に屬するものと信じたる時の如何に樂しかりしよ。多く敵を作る人は、多く人を疑ひしものである。世を怨み、人を怨むものは、世を疑ひ併せて人を疑ひしものである。同じ信ずる上は、惡と信ずるより善なりと信じ、醜をば美と化し、戰爭は勝つものと信ずることの如何に我等の心に平和の春風が傳はることよ。不思議を不思議として疑ふよりは、不可思議として信ずることの、如何に力強く感ぜらるゝかよ。疑へばとて疑の雲の晴れ渡る我等ではない。益々霧深く闇に包まるゝのである。疑ひしとて幸運の門は開かるゝにもあらず、信じたりとて死魔の手に導かるゝとは限らぬ。疑ひて不運の雲に鎖さるゝより、信じて魔境の淵に沈むのが我等の本懷である。「地獄にれちたりともさらに後悔の心候はず」とは親鸞聖人の信仰である。聖人の一生は此信仰によりて始終したのである、一貫したのである。此より以上の堅き信仰はないのである。

ろも我等の運命は如何に。太平洋上に彷徨ひし船の如きものである。正しき航路ありと信じつゝ、而も他の航路よりさまて風波高からざるも、兎角我等の運命は荒き惡魔の波に翻弄され、愛慾の廣海に溺れ勝ちである。一たび得意の順境に立つと共に、自己の地盤を踏み外づすことの多きは、全く自己を省みざるの過である。自分が自分の力で順境に達したものと誇るのが。丁度野邊の美つくしき菫が陽氣のまに〳〵咲き匂ひしは全く自己の力と思ふ如く、日々夜々我等を溫ためつゝ護りつゝある、見えざる佛の力を忘れたのである。我等は常に照護を受けつゝ照護をば照護と思はず、佛の存在を疑ひ、佛の實在を疑ひ、稍もすれば慈悲の手を離れて荒らさ〳〵浪高き他の航路に進まむとするのである。舵を失ひ船覆へらむとして、始めて佛の救の手によりすがり、より立つのである。此に於て我等は確に見えざ佛の力を感得したのである。此上はよかれ、惡かれ、何事も佛の御計ひに任せて、運命の如何を顧慮するに及ばぬ。悲めばとて何程の事やあらむ、悶えばとて惱みは消えるものではない。唯佛の力のみ我等の闇路を照すのである。而して此の見えざる力は無限なり、無邊際である。宇宙にあまねく、六合の樞柚となり。一切衆生を救濟する甚深微妙の力である。此の見えざる力を感得するに

由て、吾等は溫たかき生命を與へられ、滿身大悲の光明に包まるゝのである。この力、これ語るべからず、說くべからず、況して見るべからざるものである。唯感得するのみ、感得によりて大悲常に我身を照し護るのである。そして我々は淨い〳〵佛の國に近よるのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

無題錄

鈴木卓苗

仙臺の海岸に菖蒲田といふ所あり、ある年初夏身をうつしてかしこの朝夕に心をいれぬ、

ろの打返し〳〵よせ來る波の音をきく毎に想ふ、

見よ、小半里にみたぬ白砂長汀のいつこも同じかるべき男波女波に洗はるゝを、何處にその力のこもりありてかく日ねもす夜もすがら打よせ〳〵する波の音ならむ、知らざれどいぶかしきはその洗はれたる跡にのこりたる波の繪畫なるかな、ある所は石盤の如く滑かに掃はれたるあり、ある所は海藻のうづたかく打よせられて足のふみどもなきまでなるあり、こゝには美しき小貝の取置かれたる樣に打あげたるあれば、かしこにはカキ、クラゲなんどの屍殼のみ横はれるあり、同一の力によりてなされたるものゝ必ず同じかるべきは我等の知得せる知識なるに、しからば、よせては返す波の音に高きと低きとの差こそあれ、その同じかるべき働きの下のなどてかばかりの異りたる影の畫き出されしや、

思へ、小半里にみたぬこの濱も、そこによせくる波の音もあとに畫かれたる波の繪も一々これを彼の方處の無限なるにたくらべ、力の無量なるに較すれば、こはあまりに小さき比較なるよ、しかり、この小さき所にあらはれたるだに吾等の知解を惑はす、

あはれ吾等は愚かならずや、はじめに佛の御力を計量し、そのありかを探り當てんとしてそこに又無明長夜の暗みが發生する所以を究めんとしたりけるよ、

○

甚だ明かなるものは却て見えぬものなり、

白熱太陽の如きはその光不遍の所なく、その明の達せざる所なきが故にろの光明の中に居るや、吾等數々忘れむとす、今やろの光明の中なる吾を、

吾ある日暗室の中に於て戸隙より入り來る光明の赫燿として暗中を貫けるを見て、甚明却不明なるの理をさとりぬ、

龍車を拜觀せむとして己の僑居を出て、そのよく拜觀せらるべき場所を撰びて待つが如く、又エマーソンの所謂吾等が目前に一幅の畫圖を展くや、ろのよく見ゆらむやう光線を撰びて掛くるが如く、吾等が世にありて眞理の光明を仰ぎ見るべく亦好時好所を撰びて立たざるべからざるなり、

深林に入りて吾等が嘗て都門に聽かざるの幽韻を感得するは之が爲めなり、墓標の間をたどりて吾等は嘗て公園に見ざるの寂寞を觀取するは之が爲めなり、眞理の光明を仰ぎ見る所之を尋ねんには天地到る處多からむ、されど吾はこゝに白

浪よする海邊の閑村をあげむ。

家を出で人馬を忘れ獨り凝然として白砂のつくる處こゝしき岩角の上に立ちて心を水と天とに打ひたして、爽心轉た恍惚たるものあるを覺えむ、一導の光明あり、飛んで身内に入るが如く大天大水又我あるを知らざらしむ、この時我眼明かなること炬の如く、我心徹利なること電光の如くならむ、

◎

宗教に於ては教祖の人格を憧憬するを以て信仰の門となすとは上杉文秀師の物せられしところなるが、近日吾も亦其理正に然るべきを思ふの情に堪へざるなり、

初めて道を求め來れる人あらむに、これに地獄極樂のありかを說き神佛の嚴存を說かむは彼をして益困惑の淵に沈ましむるに庶からむのみ、何となればこの高妙の道理を信じ難きは汝の不信なるによる信仰の火を以てその不信の暗を燒き拂ふべし要は唯その道理あるべしと信ずるにありとは彼等說教者の慣用の手段なればなり、吾幼かりし日亦かくの如きことを以て强いられき、吾には聞き知れる知識の少からずあるやうにのみ覺えて之を地獄極樂などの天上地下にあるべしとも思はれず、こは釋尊の方便なるべしとのみ思ひてやみぬ、今より之を思ひ見るにそは却て無理ならざりしよ、

あはれ吾はしも釋尊の尊くすぐれたるをば思ひあこがるゝの暇あらざりし、言ひ換ふれば釋尊の人格を憧憬する所あらざりしなり、されば佛の有難き法門も我眼には世の物理化學の道理と撰ぶ處なく、拔苦與樂の聖旨も慈母が恩賞の一滴にまさることなく、諸惡莫作衆善奉行の大抱負もれのれが立身出世の望みにたくらぶるを敢てするを憚らざりしなり、

偉大なる人の傍に居る人は遂にその偉大を感得するものゞとエマーソンが言ひたるもまことにこの道理あるべし、こは德高き人の感化がその傍なる人を包むが如く大なるによるとは言へ、而も爲めにこを受くる人のこゝろに障害なきこと恰も小兒の執意なきやうのよく見るもの聞くもの悉く爲めに啓蒙の材となるが如きによる、

之を譬ふるに廣濶なる野の中に立てる一つ家の如きか、屋敷をめぐれる木立なければ南北の風勢をつくりてその甍を鳴すべく、敵に備ふる東西の流なければ來るものは舟車の煩しきを用ゐず、また土塀の嚴めしきなく喧犬の守りなきまゝ訪ふものは晝夜を擇ばず、商賈工人心をきなく出入すべし、人の身心を修むるにその用意かくの如くなることを得たらむにはまことに何の道理か入らざらむ、如何なる敎か奉ぜられざらむや、

敎祖の人格を憧憬するといふは身心の外障を除去して不用意の境に入ることなり、信仰の門戸を通ずることなり、已にこれあり、しかる後には何の敎か奉ぜられざるべき、

◎

嘆異鈔に「よき人の仰せを蒙りて信ずる外に仔細なきなり云々」とあるをば世の人多くはその「信ずる」の文字に忸みて重要なる所を閑却す、われ想ふに「よき人の仰せ」と言へることゝまことに力と生命とのこもれる所なれ、

吾等まことに「よき人の仰せ」を蒙らむには又何等の用意をか要すべき、只「破竹の勢あらむのみ」か、

「信仰」の二字を按ずるに、敎祖の如き人格を憧憬し之を信じ之を仰ぐとの意にあらざるべきか、「信心」「信念」などの文字あるに徵するも吾が思の甚だ遠からざるを知るべきか、

◎

「宗敎」と言へばある特種の人のみ關はるべきことゝ思へる如く今日「信仰」とさへ言へば佛を信ずること、神を拜することのみのやうに思ひ做し、信仰の精神狀態如何に付て考ふるものなき滔々としてしかり、これ道を傳ふるものゝ罪か將た信ずるものゝ過か之を知るに由なしと雖も、宗敎の社會的職能の如何を自覺せざるに坐すべし、愛兒を失ひたる母の戀々としてそを忘れ難く三食に泣き寢に泣きもだゆる事にのみ宗敎の關知するとなし、愛情の破綻にもだゆる想思戀愛の人には宗敎預らずとなすは今日の宗敎家にあらずや、又一德をあげ一失を悲むはこれ如來の慈悲を信ぜざるに坐すとして舊惡を包み盜難病災を怖るゝが如きものをば法律と警察と醫術とに委ね去らむとするは今日の說敎者にあらずや、

固より、天下有識の士と雖もなほ宗敎は病者敗者の避難所に過ぎずとなすことや、あゝ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

▲愛▼

愛は年若くして又柔和なり、愛の神は其柔和なることを謳歌せんが爲に、ホメーロスの如き詩人を要す、ホメロース、アテーに就て其女神なること及び其柔和なることを謂へる言に曰く

『彼女の足は柔和にして其歩むや地を歩まず人の頭を歩む。』

愛は軟柔なり、愛は優美なり、愛は正義なり、愛は節制なり、愛は勇氣なり、愛は智なり、愛は詩人なり、愛は秩序の創造者なり、愛は平和を作るものなり、詩に曰く

『彼は地上に平和を與へ荒ぶる海を靜む、
彼れ海を靜め、苦しむものを寢らしむ』

《プラトー》

『信仰問題』自序

如何にして信仰を攫むべきかとは現代萬人の叫にして、如何なる理想を以て平和なる社會を來すべきかとは二十世紀の宿題也。蓋し信仰を求むるや、夫れ燧を鑽るが如きか。徑々乎として之を打ち、矻々焉として之に從ひ全力を傾注して、其間半點の餘地を存せずむは、遂に燦然として靈光の英發するに至らむ。既に靈火一たび點せむか、腐敗燒く可し、罪惡盡すべく、慈愛悲憫の熱情能く萬靈を融和し、遂に平和清淨なる樂土を來たして理想の社會を實現することを得む。

信仰は苦悶の成産也、平和は慘劇の結果也。人生一たび激浪に漂ひて初めて其眞個の意義を悟り、世界慘憺たる舞臺を過ぎて終に最後の光明を認む。昔者源平の戰ありて遂に鎌倉時代の平和を開き、蒙古の外戰ありて國民は初めて偉大なる自覺を生せり。此時に當りて佛教の信念正さに其極に達して電光影裡春風を斬り、靈界の威力森々として國民の上を蔽へり。朝廷は嚴肅なる禱を捧げ、野外忽ち警醒の叫あり。風雨一過。終に圓熟和醇の信仰は清明の天地を開闢し來る。今や正に我國民は第二の鎌倉時代に入り、絶大の使命を荷ふて世界の舞臺に上らむとす、洵に是靈活なる自覺を生ずべきの時、肅々として自ら戒め、以て佛天の照鑒を仰ぐ可し。內心の至誠一たび到らば天地亦感應せむ。萬峯過き來りて平地あり。崇高なる理想を實現して、平和の光明を世界に光被せしむる豈夫れ難しとせむや。

吾人曩きに微言聊か國民の宗教的自覺を促し。歐米に遊ひて宗教界を視察すること三年。歸來專ら信仰問題の根本に向て修養を切礪す。本書收むる所、皆實驗の告白、理想の縮寫也。讀者幸に心絃相和して共に樂土を闢くを得ば、吾人の本懷亦何そ之に加へむ。

明治三十七年紀元節の日

近角常觀識

精氣之極

八十三翁

圖書を右にし、刀劍を左にし、悠然客に對して坐談に倦むことを知らざる童顏鶴髮の老博士より、一種の長命術と、一種の神秘說とを聞くを得たり。今其の要を摘み、讀者と共に、是より何等かを學ぶ所あらむと欲す。

（無絃生）

何、乃公が老而益健なるに就て何か秘訣でも有る乎といふのか。それは乃公自身にも實はわからぬので、別段、松實を食ふたといふ譯でも無いし、石髓を服したといふ譯でもないが、凡て人間は暑さに堪へ寒さに耐へるといふことが心身を强健にするに最効驗が多いやうに思はれる、克く寒さに堪へる者は暑さにも堪へる、克く暑さに耐へるものは寒さにも耐へる、一方には堪へるが一方には耐へられぬなどゝいふものは話せない。大体寒暑を防ぐといふのではいけない、寒暑と戰て征服せねばいけない、寒暑にさへ勝てば妖魔病魔に勝つことは極めて易々たるものである。人は常に氣を以て心身全部を充たせて置けば決して病魔などに襲はるゝ恐れはない。乃公は寒中でも決して襟卷を爲ない、此間もあの雪吹の晩に教授會から歸りて來るのに、あのつめたいするどい風が首すじへビヅ〳〵吹き込で來るのが誠に心地が好い、さういふ風で乃公は今年八十三になるがまだ藥の味を知らない、つまり此方に氣が充ちてるものぢやで先方がやう這入らないのと見へる。

乃公が少し普通の人とちがう所をいへば、乃公は毎朝三時に起きて、先づ桶に冷水を汲て其中へ頭を頸まで五分間ばかりつき込んで居る、勿論耳の中へも水が這入る、そら擤はぬそして水の中で眼を開て居る、之が乃公が今に至りて眼力の少しも衰へない一のわけらしい、そして頭痛などの經驗を爲ないのも此處等に原因があるらしい、頭病で困てる學生に此の方法を敎へてやつて間もなく全快したのも少くない。それから自分に雨戸を開け障子を開放つて新鮮の空氣を吸ふ、之は誠に人生の快事である。其中に朝飯を食う、それから湯に入る、湯から出て手桶に三ばい水をひつかぶる、それから居間へ來て坐ると、ホコ〳〵と暖まりて來て誠に心地が好い、そうしてると夜が明ける。此通り毎朝三時に起きる事、頭を冷やす事、新空氣を吸ふ事、湯に入る事、水を被ぶる事、此の五ヶ條は年中一朝も欠かさない、旅行中でも三時に起きる旅館へ特別に賴で朝湯を立てさせる、內の書生にも乃公の通りやらせる、ナマクラ者は逃げ出すが、辛抱する奴は餘程弱い奴でも半年たゝぬうちに極めて達者なものになる。

運動か、運動は別段せないが、毎朝刀劍を五六本つゝ引拔て油を注したり、拭うたり、振り回はしたりするので、隨分好い加減の運動になる。

乃公は壯年の頃、軍中に在りて、三日の間も濡れ衣を着たまで服務した事があるが、其時に自分の隊で感冒に罹らなかつたものは唯乃公一人であつた、かういふ風なとは兒供の頃からの習慣になつて居る。人は寒氣に耐へるといふやうなことは壯年になつてから初める譯には行かないといふが、そう

かも知れぬ、併しそういふ筈はない、現に内の書生などはみな一人前になりてから初めてそうして續けて居る。

牛乳は飲まない、牛肉は嫌てもないが、近年齒を少しいためてからあまりは食はない、魚肉は盛にやる、便秘の恐があるので常に野菜もやる。大鳥もそういふて居た。大鳥も朝は隨分早い。

乃公の最好物は餅である、盛の頃は一度に一升位食つたことはいくらもある、今でも餅は年中たやさない、旅行には餅を行季に入れて持て行く、乃公の身体は餅と新空氣とで大部分が出來てる。

寢る時間は一定して居ない、大抵は十一時前後に寢る、又八時頃から寢ることもある、朝は必ず三時じや。一体乃公には正味二時間さへ熟睡すれは好い。考へ出すと三夜さても四夜さても徹夜するが別段身体にどうといふこともない。

夜寢ずにやれは一年で人の三年分は出來る筈と思ふて若い時からやつた、今でも其の考である。

* * * * * *

乃公は十五歳以後は曾て人にものを尋ねたことがない、全く獨學である、何のことはない自分一人で考へる、全体考へて考へつかなかつたら誰かに尋ねようといふやうなしみたれた心根を以て考へて居ては考へ出せるものでない、決して人には尋ねないといふことにきめてかゝるのである、そして考へても考へつかねば、考へつくまで考へ通しに考へるのである、そうしてると何處からか知らぬがわかつて來る、かういふことは昔の人も隨分やつて居る、一つ見せやうか、……机上にありし管子を開いて……

能毋レ問二於人一、而自得二之於已一乎。思之、思レ之不レ得、鬼神教レ之。非二鬼神之力一也、其精氣之極也。

此中の思の字を味はふが好い、思は絲なり、蠶が絲を引き出すやうに自ら考へて思想の絲をたぐり〳〵て何處までも考へて行くといふ意味の文字である、そうやつて行くと終には覺ゑず案を拍つべき所へ出て來る、此の中の消息は如何にも靈妙であつて、殆ど自分の力とは思へぬ、鬼神でも來て教へてくれたのではないかと怪まるゝ位であるが、其實そういふ譯のものでない我が心身に充實せる精氣の極、此處に至るのであるといふ管子の意見であるが、實に其通りである。

兎角物事は速成早熟を望んではいけない、堅忍して大成を期すべきである、あせらずに、ぢつと構へて身体を鍛ひ精神を練り元氣を充實せしめ、鋭意進で止まなければ必ず一歩々高うして光景開き、遂には十洲五島を睥睨すべき高巔にも達し得らるゝものである。

* * * * * *

滿身氣を以て實たすの方法か、それは別段困難なことでもない、全体氣といふは天地の精氣のことで、此も管子でいける、

虛二其欲一、神得二入舍一。掃二除不潔一、神乃留處。

吾々の身体は家屋のやうなもので、其中に欲といふ不潔物が一配たまつて、足の踏み場もないやうな始末てはいけない、虛其欲といふても欲を虛ふするとが出來ないから仕方がないといへばそれ切りのものであるが、其處等が人間の考へ

所ではないか、勿論虛其欲といふたとて、強ちに裸になりて沙でも嘗めて居れといふのてはない、不正不潔の欲がいけないといふのてある。

管子にまだある、

靜則精、精則獨立矣。獨則明、明則神矣。神者至貴也。館不二辟除一則貴人不レ舍焉。故曰、不潔則神不レ處。

靜、精、獨、明、神の五字を味ふて見るが好い、欲といひ不潔といふは所謂人心で、貴人といひ神といふのは所謂道心てある。

他動物には心が一つしかないが、人間に限つて心が二つあるといふとを忘れてはいけない。

管子もいふてる、

心之中、又有心（動亂之心中、又有靜正之心也）

管子の此語は書經から來てる、書經に、

人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。

書經の此語は易から來てる、

易では

離を心となす（心とは欲なり不潔なり人心なり）
坎を性となす（性とは神なり精氣なり道心なり）
心は☲にして中虛なる形
性は☵にして中實てる形なり
而して離の卦は☲☲なり
之を詳解すれば

人心　道心
不正　正
陰陽陰　陽陰陽
外　六五四　三二一
内

内なる道心は、奇數の所に陽あり遇數の所に陰ある故に正なり。外なる人心は之に反す故に不正なり。

人心は不正なるもので道心は正なるものといふとは誰も知りてるやうであるが、此の通り易理に照して見れば一層明瞭て寸毫も爭ふべき餘地がない。易理は時間を盡し空間を極め、天地に透徹して動かすことの出來ない眞理て有つて、此の眞理に合致する行動は即ち人間の最高至善至安の生活てあることを信じて疑はざる者は、樂んて此の易理に合致しやうといふとを力めざるを得ない。

子はどういふ考をもつて居られるか知らぬが、一体今の多くの青年は兎角枝葉に走りて大本を忘れて居るらしい、本來自分の本尊てある至貴至正の道心如何を顧ないて、たゞ不正不潔の人心の跋扈跳梁に任せて居るらしい、今の青年は人間に心が二つあるといふ事を知らないらしい、今の青年のやうに心身全體が物質欲に蔽はれて居る分際では、糞土に埋もれてる家屋のやうて、貴人の來り舍るべき餘地がない。それでも心機一轉、外側の心、不潔の心、不正の心、所謂人心人欲を辟除し掃除して見れは、至高至正の神は自ら來り舍るに違ひない、外より來るてない、内から顯はれて來る、此處に神と

いふは即ち性なり道心なり精氣なりである。斯樣にして顯はれて來た道心精氣は、實に吾々人間の本來の眞面目で、其の實質は昔も今も此の後も常に天地に充實してる所の元氣と連りて居つて、もと〳〵同一体のものである。此の精氣此の道心の活動其儘が天地の元氣宇宙の大精神と共にする大活動である。斯ういふ譯のものであるから、電光一閃吾等の精神の奥底に顯れ初めた一點の精氣を捕捉して、大に之を涵養し、盛に之を擴充して、常に我が心身全体に充滿させて置けば、奈何なる誘惑も病魔も犯すとの出來るものでない、乃公は斯ういふ考で居るから年をとることも一向に氣がつかない譯じや、世人は欲には離れ切れぬ、人心は制し切れぬといふて困てるが、それは人心を以て人心を制しやうと思ふからいけない、古人が心を以て心を制すといふたは、道心を以て人心を制する意味合である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

氣を養ふといふ事は何か特別の時にだけ氣を張て居るといふやうなことではない、何時でも全身に氣を實たして置かねはいけない、一寸でも隙間があれば直きに誘惑に狙はれ病魔に襲はれる。乃公は八十三になりても五官に聊かの不都合も感ぜない、思考力も衰へず、講義をすれば室外まで聞こえるといふ譯で。今に腰がちつとも屈がまない、腹もへこまない。此通りポン〳〵に腹が出てるのは、何時も斯ういふ風に正坐して全身に氣を實たして置からでんあらう、まさかの時よりは平生が大事で、兎角人はぼんやりしてるのがいけない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

信仰問題

予が信仰に關する質疑に答ふ

近角常觀

二、信念確立以後の行爲に就て

（一）宗教は一方には嚴格なる實行を誨ゆると共に、一方には無限の救濟を說くものである。然れども動もすれは救濟を說くの極罪惡を寛容するか如き誤解に陷り易い、此の點に於て最も深く戒心すへきである。（政教時報九七號二頁信仰問題四十一頁）

吾人の宗教は信仰の一點である、直接に佛陀に接觸して其慈悲心中に融化せらるゝのである。（中略）此偉大なる佛陀か吾人實行上に於て與へらるゝ指導なるものは非常に力强きものである。吾人の心中に感ずる佛陀は事件の起る度毎に一に敎誡を下し指導を與へ賜ふこと恰も釋尊の世にありて親しく訓戒を下し賜ふ如くである。是決して驚くべきことではない。云々（政教時報九一號五頁信仰問題三三頁）

これらの點は精神主義の諸兄の唱ふるところと同しと存候が如何のものに候哉。若し相違の點有之事に候はゞ詳細御指導有之度候

（二）無限の救濟の佛陀は十方の生類を如一子視し玉ひ以レ善攻レ惡の手段によりて天下和順兵戈無用の理想を、我等に與へ玉ふと云ふか大經の示すところに候得ば吾人は戰爭を非認すべきものに候哉時節柄此邊のところ先生の御信仰上より御指導相成度候。

（一）此質問は餘程誤解に陷り易き恐有之候。其誤解を來す所以は、原理的に此問題を解決せむと試みる故に候。即ち佛は無限の罪惡を救濟するものなりと原理的に斷定するときは然らば我々は如何程罪惡を犯しても差支なきかと云ふ邪見なる疑問來り候。又信仰あるものは道德を嚴守せざるべからずと原理的に斷定するときは、然らば道德を嚴守せざるものには佛の救濟は至らざるかと云ふ窮屈なる疑問起り來り候。抑々信仰及道德の問題は我々の信念及感想を以て語るにあらずんば生命はなきものと存候。若し感想を以て此問題を說けば頗る明了なる次第に候。先づ第一に佛陀の救濟を感ずる心持は吾人如何なる罪惡を有するものと雖、佛陀は無限の慈悲を以て之を救ひ玉ふことを感泣する次第に候。嘆異鈔に『善人猶以て往生を遂く況や惡人をや』と云ひ、又『本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆゑに惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきゆゑに』との玉へるが如きは、即ち此感想の極點を云ひあらはしたるものに候。信仰を得るには先づ自己の罪惡を感じて殆と身をおくに處なく始めて佛陀の慈懷に安ずるものなれば、罪惡が深ければ深き丈それ丈佛陀のお慈悲は深きものに候。佛陀救濟の前には善も惡も無之候、是れ實に仰けば愈々高き點にして感じて感し盡されぬ不可思議力に候。

以上は信仰の有樣にしてこれより其信仰の上に立ちて平素行動する感想は如何といふに、一擧一動佛陀の冥見に耻ぢ入りて身を愼む次第に候。於是始めて道德が行はるゝやうになり、其心の有樣は恰も佛陀が親しく指し示さるゝやうな感有之候。此點より見れば作法を具へたる戒を保つにあらざれども、心の中に宿り玉へる佛陀が指導を與へ玉ふこと、恰も戒を保てる人が一言一行其作法に違はぬやうにすると同樣なる心地に候。勿論平日の一擧一動に就て一々意識には上らざるも、平素吾人が佛陀の冥見の下に身を愼しむことは有之候が猶重大なる事件ありて右するか左するかに於て正邪黑白の分るる岐路に立つとき吾人は佛陀の指導を仰いて正しき方に猛進すべく候。如斯場合に於ては慥に一種の力を感じ候。『信仰の餘瀝』第十五章「信念の修養は實際問題に如くはなし」と云へる章に此意味を詳かに披瀝致置候。彼文字を書きて後二三ケ月の間に於て果して最も、危險なる場合に遭遇し佛陀の指導

を感じて實行したりし爲め、偉大なる御助けを蒙り今猶内に自ら顧みて大に心に安ずる次第に候。此の如き經驗は重大なる事件の時度々有之候。然れども是は御尋ねの如く信念確立後の行爲に關する感想にして、信仰確立の時の感想は前記の嘆異鈔の如くに候。こは『信仰之餘瀝』第一章「宗教的同胞」に於て披瀝致し候通り、人が大なる苦悶を經て罪惡觀に陷入りたる時、佛陀無限の慈愛を感して之を解脱する時の感想に候。末燈鈔に『はじめて佛の誓ひをきゝはじむる人々の我身のわろく心のわろきを思ひ知りて、此身のやうにて何ぞ往生をせんずるといふ人にこそ煩惱具足したる身なれば我心の善惡をば沙汰せずしてむかへ玉ふぞとは申し候へ。かくきゝて後佛を信せんと思ふ心深くなりぬるには、まことに此身をも厭ひ流轉せんことをも悲みて、深く誓ひをも信し阿彌陀佛をも好み申なんとする人は、もとこそ心のまゝにて、あしきことをも思ひ、あしき事をもふるまひなんとせしかども、今はさやうの心を捨てんと思召し玉はゞこそ世を厭ふしるしにて候はめ』。と有之候は如何にも佛陀の慈愛に感泣する感想と佛陀の冥見に身をつゝしむ感想とをよくもかく適切に示し玉はりしとと喜び申候。然るに此二者は混同し易きものと見えて、佛は罪惡あるものの救濟し玉ふか故に罪惡を犯すも可なりとの誤解に陷入りたるものに對して、末燈鈔に左の如く戒められ候。曰く、『煩惱具足の身なればとて心にまかせて身にもすまじき事をゆるし、口にも云ふまじき事をもゆるし、心にも思ふまじき事をゆるして、如何にも心のまゝにてあるべしとまうしあふて候らむこそ、返す〳〵不憫に思ひ候へ。よひもさめぬさきになほ酒をすゝめ、毒も消えやらすにいよ〳〵毒をすゝめむか如し。藥あり、毒を好めと候はん事はあるべくも候はずとこそ覺え候』と。如何にも剴切痒を搔くか如き御教化に候。

序てに申上候御質問の文中には含まれ居らざる事にして用語上頗る混じ易き思想有之候。即ち信仰者の目より見るときは天然の事變、人事の出來事に於て深き意義を發見すると有之候。親鸞聖人が提婆阿闍世の逆惡を以て佛陀の救濟力を示し玉ひし大聖權化の御手廻なりと感ぜられ、流罪にあひて是亦師教の恩致なりと感ぜられたる如き事に候。これ原理的にいふべき事にあらずして、信仰者が種々の出來事に遭遇したる時の感想に有之候。

猶精神主義云々の御質問の意味少しく要領を得兼候間、我か感想を積極的に披瀝する事に相止め申候。

（二）宗教の見地より戰爭を非認する論にて現今の有名なる人は、レオ、トルストイ伯にして、古より此主義を勵行して從軍せざるものはクエーカー教徒に御座候。勿論宗教の理想とする所は人類の平和にある事なれば、戰爭は其理想と相反することは云ふまでもこれなく候得共、問題となるべき點は直

ちに其理想通りを主張して、主義として戰爭を非認するか、理想に達すべき道行として之を寛容するかの二點に有之候。抑々宗教なるものは人生を導びきて理想の境に達せしむるものに候。人生若し直に理想の如くならば宗教は不必要に候。故に宗教は一方に高尚なる理想を有すると共に、他の一方には不完全の人生を認め居候。故に人生には幾多の暗黑を以て充されつゝあるものに候。戰爭の如きは人生に伴ふ弱點の一に候。若し人生をして直に理想の如くならしむることを得ば幸ひ之に過きず候得共、これ單にいふべくして行ふべからざる主張に候。故に吾人は人生に於て避くべからざる事件として之を認め、寧ろ徐に如此戰爭を促し來る精神的不和に向て救濟を試みむとする次第に候。極樂淨土の如きは人生以上に超絶して存在するものなりと雖も、其理想を此世界に實現することは最も好ましく候。之を實現する方法は佛を信ずることによりて自然と至るものに候。大經の天下和順兵戈無用の如きは其有樣を描かれたるものに　。之を以て直に戰爭非認の理由とするは少しく穩當を欠くかと存候。之を要するに、人間たれば食はざるべからず、漁獵せざるべからざる如く、止むを得ず、時と場合とによりて戰爭せざるべからず　。大乘戒に於ては護法の爲めに干戈を許す明文も有之候。故に吾人はたとへ戰爭あるも正しき主義の爲め、又平和の理想にゆくべき道行として之を認むる次第に候。而して一面には精神上に一大信仰を養はずんば、平和なる理想を實現することは難事と存候。信仰なる者は人生の自覺にして、其自覺に先だちて苦悶ある如く、國家の自覺に先ちて國民が苦悶するの實驗が即ち戰爭なりとせば、（本號社說參考）戰爭は修養の時機として大に意義を有する事と相成候。かく信仰の立場より戰爭を觀るときは國民の自覺を促す佛天の警戒と感ぜられ候。

三、解脱涅槃と宇宙の本體

人生實際の苦悶に陷りて遂に之を解脱し得たるその平和なる結果を涅槃と稱したものである。（政教時報八七號三頁信仰問題七頁）

涅槃は煩惱を解脱したる妙境であつて決して本体でない。佛陀は飽まで無限の慈悲と救濟の威力を具へたる人格であつて決して宇宙の本体でない。（政教時報八八號四頁信仰問題一八頁）

我々は實驗上時々『大なる力』を感ずることがある。非常に暖き『慈悲の力』を感することがある。非常に清らかなる『智惠の力』を感することがある。此『人間以上の力』は佛である。（政教時報百〇五號一九頁）

此佛陀の力が法界の大なるより微塵の小に至るまで普く周偏してまします。此の如く十方に周偏せる佛陀の力を中心に集め來り、三世に示現せる薩埵の人格を含有せるものが即ち無量壽佛の願力である。（政教

（時報百四號一〇頁）

佛教が宗教としての要義眞髓これを實行する上に於て、他の諸種の部門の智識と相調和して行く必要かある。たとへば宇宙論であるとか、又哲學的本体論とか色々の智識と相關が始まる云々、抑々眞如にもせよ、法性にせよ、若くは實相にせよ、宇宙の本体である。哲學的原理である。其哲學の上て涅槃を說明し、若くは佛陀を說明したまでのことである。（教政時報八八號四頁信仰問題一七頁）

是等の諸文を對照して考へ候ても、何となくろの周偏の力と涅槃即ち佛陀心中の平和との相關の上に明瞭の考が得られ不申候。まして本体論との相關が猶更ら解し得られず困入候。御教示なし下され度候

此御質問は前號佛教之眞髓の講義に於て、殆ど此問題に答へ盡したるかの如き感有之候。故に唯々御質問の要點のみを御答へ可申候。抑々解脫涅槃は無明を亡したる心中平和の實驗たると同時に、永久、清淨、生命、靈智等の積極的のものに有之候。故に如此境に達したる佛陀はたとへ身は死しても其境と共に佛の人格は存在しつゝある者と確信致候。其積極的なる者が吾人の實驗する慈悲智惠の力にして、到處に周偏せる所なき者に候。御質問に人間以上の力若くは法界に遍滿する等の言語ありたる爲め、或は宇宙の本體を意味するにあらずやとの御疑ありしかと推察奉り候。私は涅槃と大なる佛陀とは一物の兩面の如く考へ候得共、其大なる佛と宇宙の本體とは思想上何等の關係も無之候。抑々本體論なるものは佛教に伴ふ哲學なれば、後世其哲學を以て涅槃を說明したるまでの事に候。即ち小乘佛教に於ては五蘊假和合の人身なりと云ふ哲學なるゆゑ、其立場より涅槃を說明し、大乘佛教は一元實在の哲學なるゆゑ、其一元を顯現する事が即ち涅槃なりとする故に、眞如を悟るとか、法性を發揮するとか、實相を知見するとか云ひたるものと存候。然れども五蘊若くは物質が涅槃若くは佛陀と稱すべからざる如く、眞如、法性、實相は決して涅槃若くは佛陀と稱すべからざるものに候。是等の問題は猶佛教之眞髓の講演に於て段々研究可仕候。（完）

風尚餘韻

友と訣る

天都城

一

戰は人文史上の一大悲劇なり。屍山を築き、血河を漲らす、果敢なき世相をば理論の迂餘を俟たず、學說の縈廻を借るゝ

なく、ものの直截に說明する唯一の方法なり。それ半夜月山の端に傾きて郊原靑く陣營多くまどろまず、悲愁か、あゝ滴る一點の雫、誰か不覺の涙と誹らんや。天籟死しぬ、地籟默したり、獨り異域の原頭重き步哨の任務を勵む、小なる腦中徂徠する勇士の思、誰れか人生の深きに透らずと云ふや。昨は艦上務を共にし、いま砲烟一發乾坤黑し。顧みて戰友血に染みたり。而かも斷末魔の窮苦を目睹して軍律前にかゝり、救ふを得ず、擁すること能はず。さなり、猛夫の志此の世此の生泡沫無幻と觀ずべきなり。

何を以て軍人をば常に沒趣味なりとや云ふ。其の誹り、寔や軍人の常人と相去る甚だ遠かりしを以てなり。渠等閑に任せて豪放を裝ひ、磊落を衒ひ、牛の如く、馬の如く、猿の如く、食ひ飲み且つ淫す。軍人なるが故に品性を全く無視し、動物に近きほど本能的にして人蠢く、之を赦したり。怪奇甚しきかな。渠等に文學なし、まして哲學宗教のあるべけんや。此の皮相に居り、否寧ろ殺人の機械たらんとして人生の深きを忘れたり。車輪なり、車軸なり、部分なり、全部にあらず。この意に於て戰は廓淸なり、打破なり、こゝに渠等は目をあげて人生の深玄を望み、世の神祕と觸る。かくて軍人はゼントルマンに耻ぢざらむ。否戰爭を經たる軍人は目のあたり人生の根本義を見む。斯くてぞ文豪トルストイは一度軍旅に與り、かの牢乎たる世界觀人生觀を樹てたるなれ。クレーキローマの文人多く戰に苦役したりしと云ふ、又偶然にあらず。即ち戰爭によりて軍人はその人格を淸淨にし、機械より脫るゝを得むか。

戰によりて國力强健に赴ける國あるを聞かず。戰後經營は七年戰爭の終りにも難しとしたるところなりき。近くは日淸の役、わが軍勝ちて猶瘡痍癒えず。即ち戰に於て物質的効果を求め得ざること爛として明かなり。即ち戰に於て物質的効果を求め得ざること爛として明かなり。されど精神的意味に於て、われは戰の德を讃美嘉賞せざらんとするも能はず、興奮禪なればなり。されば戰や軍士の廓淸にとゞまらず、國民の覺醒なり。國民の勢偸安に馴れたる今日に於て殊に然りとなす。

二

三國の干涉により空しく遼東を還附するや、將士の血は燃え扼腕切齒して彼れ擊つべしと、白日空しく流るゝこゝに十年、東洋問題は愈繁く、東亞の空日に〳〵曇る。省みればレザノフ維新の創業あはたゞしきを好機會となし、わが北地を襲ひ、且つ樺太を占め、皇系長へなる天孫國民の史上に一汚點を加ふ。貪婪猶盡きず、猛爪を滿州に貫きて、友邦の思にさかず、ペートル以來の侵略狡獪に則り、燦爛たる二十世紀の文明を無視す。蠻人由來禮に嫺はざるは夙に怒したり、されど狡猫白日に爪を磨きて、其の慾に飽かんとす、あゝ一指風を止めん愚にも肖たるかな。

同人の間羽檄は傳はりつ。其の意征露に就かんずるわが友を送らんとてなり。友の二中尉は近衞師團にあり。正さに動員令をうけて此の席に侍るを得ず。友の一中尉第一師團にあり、同じく然り。他の二三氏皆事軍國にかゝりて來るを得ず。時局に勇み集り來れるもの盡く軍人にあらず、數へて僅かに十五、相顧みて憮然たりき。時は十時、一坐狼籍稍々興を盡

す。我獨り樓に凭り、酒氣を吐いて雲行あやしき大空に問ふ。月出でず、星光濃雲の中に微か、さなり先來雪續々、天地淸寂、不忍の池面、暗に鎖ぢ。其のほとり稀れに提灯の行きかふを見る。

はや散ぜんとして空谷の跫音よ、一坐俄かに色めきわたる何事の起れるにや、心まちし號外のうれしき出てたるにや、否われらは獨り友の一中尉を俟ち得たればなりき。

三

血に渴ける獅子ならんには獰猛の兇相を示さなむ。綿羊に迫る殘狼は內心大に疚しきあり。わが陸軍、わが海軍、獅子、なりや、狼なりや、噫何ぞ然からむ。

わが友を滿州の寒野に送らんとす、戰爭の可否又批判をやめず。唯若き軍人の福祉を祈れ。虐殺戮伐の慘事を說かざれ、文明の否認人道の蹂躙を罰せんすべなればなり。敢て綿羊の肉に爭はんや、天眞なり、戰はざるべからざるが爲めにしてかれの道樂的企劃と大に趣きを異にす、わが友中尉の志ぞ正さに此の消息を傳ふるものぞ。かれ軍事の機微下僚の知るところにあらずと辭を卑くす、されど戰や避くべからずと信じて意氣俄かに軒昂、而かも其の風丰や戰爭的猛惡に現はれず、淡如なり、是れ神人を以て人を伐せしむる攝理の現はれにあらずとせんや。自覺なき天眞こそ寔に其の左券なれ。

四

莖を同じくすと雖も、枝は唯理を同じくするに過きず、中學なる靈壜に同じく鑄られたりと雖も、境地今は各異に、職業多く同じからず。昨の腕白兒いま多く思慮ある紳士と化したれども、われや蠢愚舊の如く懊惱益々繁し。嗚呼わが友玉となりて碎けんとしてこの窮措大同じく死、思へば日淸戰を交へて、學窓の裡互に歡呼抃舞、時の衡に當れるをば潛かに羨みけり。いまわが友此の欽羨を贏ち得て揚々征途に上る、今昔の情それ堪ふべけんや。されど安ぜよ淸き友情はインニヒなり。友の成効は直ちにわが成効なり。喜び悲み嘆き悶へ若し友の心琴に觸れて同じく聲をなさずんば、そは眞の友にあらず。虛僞なり。人を指して石なりとするものなり。

死全事大はわれ常に好まず。わが乘れる時代の舟、若し我國にしてろの流に浮ぶに足らざらんには、潔く嚴頭にかゝりて碎けなむ。そはわが國民の望みなり。此の使命を帶して戰地に出づ、事の勝敗は素より利害の打算、之を除きて他に意味あり。思想史上の適不に關はるなればなり。ろれ君の章とするもの大空の星、望みは高しわが國民の理想、斯の如きは君の寤寐も忘れざる所なり。その意義、その理想、そはわが命なり。徒に勝をのみ急ぐ蠻民と類を異にす。

五

この夜の訣れ、はや長へに結ぶの期なからむ。悠忽たる人生電光の閃々に等し、いづれ解決は死なり。吾等は墓に入りて人生を知り、宗教を解し、哲學亦悟るを得ん。しかも死には一の除外例あるなく同じく味ふべき實驗なり。されど人の生に厚き前路の五里霧中却りて永遠の思ひをなす。かくて危淵に瀕して晏如たり。唯それ必然の死を豫想せばわれらはこの身もあらぬ思、戰に赴く友の命は正さに是れ、友の笑ひに悲みの潛み、擧ぐる杯涙の不祥を忌むと雖も遂にとゞめ難きは涙なり。

友に與ふる詩

波岡茂

春あけぼの丶色こまやかに
若草萠えて野にひろごりて
溢る丶光りを掬まんとするに
蔀をかため睡りに耽くる
寂しからずや人の世の春

影まばらなる月下の梅花
紫ときし霞の中に
淸韵ゆるくながる丶を
人は香もなく蠟の如生く
寂しからずや人の世の春

人萍の如夢より夢に
あるは土龍と闇より闇に
暗きを辿りて西又東
闇に慣れし眼光明を避けて
首を垂れて何處ともなく行く

道とく人は鸚鵡の如く
意義なき囈語をあやつりて
古聖の遺訓に衣食を求め
會々尊き衆生を賊し
聖典空しく埃にまみる

現の代詩人の嚙む筆は
命毛つきて穗はやせぬ
精飛び味去り無明の酒の
泡にも如かぬはかなき詩を
男の子誦せんに得堪ふべしや

かたみに胸に深く秘めたる
靈火相倚り抱ける戀は
渠等に余り聖くして
汚れし屍とよりて
浮き世の戀を與ずる渠等

あ丶寂しからずや人の世の春
若き血潮の胸に躍りて
一度呼べは髮逆立ち
再ひ不才をかこち省すれば
眦裂けて懊惱の雲湧く

五濁末世に手に手をとりて

大乘の光揚げんと契れる
同し理想に生くる友！
あゝわか疎狂をあはれみて
君な惜しみそ一臂の力

見ずや春風一度吹きて
萬衆忽ち血潮めぐり
寒林枯草再び活きて
生々の氣天地に漲るを
君を得てわれ其れよ春風

さなり生を享けて男の子我等
血あり涙ありはた力あり
信あり理想ありはた希望あり
鬼啾々の寂しき野邊も
呼ばば應へん靈なる春光

かの春草の生々に憬かれ
梅花の崇き香に醉ひて
小さき詩風に自然を弄すと云はゝ
誰れか説かんや十字架の死
誰れか仰かん靈鷲の苦行

願らは希望の油を濺き
聖き理想の野火を擧げ
かの春風の吹くまゝに
火焔ひらめく野面に立ちて
共に謠はん向上の曲

新刊紹介

小野藤太著
◎弘法大師傳
本郷文明堂

教界偉人叢書の第一編として出てたるもの、乃ち教界の偉人の傳記少なくして精神的修養の欠乏を補はかむが爲めに偉人叢書の發刊を企てたる也、此篇南都佛教の概況より説き起して、大師の系譜、少壯時代、獨修時代、在唐時代、密教開立時代、成功時代、隠棲時代の諸章に分ち、大師の一生に向て遺憾なく叙せられぬ、夫の眞言密教が一の職務とする、加持祈禱の迷信的に流れたるはこれ必ずしも大師の意にあらざることを著者は辨護せられたり、吾等も亦一代の偉人と稱せらる大師たるもの豈に猥りに今日の如き迷信的加持祈禱をなすものにあらざることを信ず、

本書は傳記としては成功したるもの也、されど偉人の面目を抽き出すに至りては未た彩色の足らざるを覺ゆ、若しそれ偉人叢書發刊の主意として精神的修養に資するとせば、多少の工夫を望むもの也。(定價四十五錢)

堀内新泉著
◎川千島
同　上

川千島は佛教信徒而も眞宗信徒の家庭を抽きたる小説にして、局面廣からずと雖、宗教ものとして最も面白く讀まれたり、會話の冗長は本書の瑕瑾にして間々趣味なき議論めきたる句あるは服ふべし、されど主人公たる文子の苦悶より大悲にかゝり漸々終焉に近くに從て、雄路暢達而も悲哀の情を帶び來りて、楚々としてよく人を動かす、希くは作者今一段の佛教的素養あらまほし、家庭の讀物として近來の良書也。(四十錢)

三浦秋水著
◎戰爭と婦人
同　上

此書一見際物的の感あるも、所論概れ穩當也。蓋し國家の時變に際して、男子には男子の職分あり、女子は女子の職分を盡くして男子の任務を幇助せざるべからざる旨意を説かれたり。殊に戰爭は男子の任務として見るべからず、婦人が自ら出征家族を慰問し、勇ましく門出を送るが如き、劍を提げて起つ男子と多く譲らざることを述べたるは、現時の場合適切なる指導なりといふべし。附錄として日清戰役の美談を添へぬ、意を用ゐるや周到。(二十五錢)

戸谷龍香著
◎討露之歌
同　上

調さゝのゝはざるか如しと雖、亦誦するに足る(五錢)

政教時報

●佛教會(高等師範學校内)

(昨年の大勢)一時評論壇上の花たりし「教育と宗教との衝突」に關する議論は、過去の夢となりぬ。何れ正しとは云はずもがな。社會人文の發達史上、一度は經來すべき道ならんかし。教育者が宗教に體達せず、宗教家が教育を理解する事無くんば、何の時何れの所にか兩者の衝突あらざるべき。必しも之を十年の昔に求めざれ。然らば今の時、兩者の關係は已に解釋せられたる宿題とせんか、教育者は果して宗教を体解し、宗教家は教育を理解せりとなさんか。現今の平和は眞の平和なるらんか。教師がカテーデルより放なつ冷かなる宗教説は、折角萠芽し來れる兒童の宗教心を、積雪の下に枯死せしむる。無きか。而して一面に於て非教育的宗教教育は、幾多の門末子弟を賊する事無きか。糊塗せられたる解釋は果して長く持續せらるゝべきか。余を以て見れば、二者の相關に付きて宗教家教育家共に前日の意氣無き者の如し非邪。

こを云ふべく吾人は余り小なりき。吾等は、敢てさる大言を口にする資格無きものなり。唯吾等は倫理に問ひ、哲學に考へ。尚吾等の胸中、解了すべからざる一團の疑あるを奈何。嘗ては儒教に入りて其旨を授けられ、嘗ては陽明の書を播て吾心を照さんとせしき。さはれ猶慊焉たる吾が心は遂に佛教に入るの因緣に遭逢せり。吾等が學校は其性質の上よりにや、宗門の士の入學する甚稀少、卅二年に文學寮出身の人來りしも病の故にて辭去せりと聞きぬ。同じ年に近江の一寺院の士來りしを、近き過去に於ける無二唯一の法門内の士となさんとす。僕が斯校に入りし時、水上浩然君、唯一の佛教青年會員たりし、僕と二人時に教界の時事に及んでや相顧みて撫然たりし。唯幸なる哉同窓の士同縣の友山崎儀次郎君夙に斯に志あり。阿部常治君亦禪を修む。此他同窓の友と話次宗教問題に及んで機漸く熟せり。遂に卅五年の冬、ストーブを圍んで佛教會組織の議成り。時の佛教青年會幹事和田鼎君外より大に推奬輔導せらるゝあり。其十二月大内、吉田、近角、和田、諸先生を聘して右尚館に演説會を催し、今後茶話會を開きて會員の心情を溫む。當日寒風肌を劈くの時なりしも諸先生の熱心なる同情と、庇護とを得て。我會が呱々の聲を放つ

に至りしは、偏に佛陀の遺光に由らずんばあらじ。

爾來吾が會の生長發達は一に近角先生の誘掖保庇に賴れり。毎週一回吾徒の爲に「佛教要領」を講せられ。今や彌尊の傳紀を終えぬ。演說會を開く事二。松本博士原始佛教を。齋藤師佛教倫理を講せらる。次は南條博士六波羅密を。近角師現下の思潮界を論せられぬ。同夜茶話會を養育院内に開き前田博士の信仰談。吉田教授の倫理觀哲學觀宗教觀を說かるゝあり。足立氏亦吾等の爲めに感化事業の實驗を語らる。

顧れば、一年有餘、事業の上に何も爲せる事無く、修養も亦甚覺束無し。校の内外諸先輩の熱心なる贊助と同情とを寄せらるゝを思へは唯慚汗の背をうるほすを覺ゆるのみ。法の爲教の爲に吾等が涓埃の功を効さんは何時なるらん。書き來るだに筆の慙る心地ぞすなる。百目木兄が會の模樣を報ぜよとの詞に、默止難くてかくは記しぬ。敢て諸彦に告げんとにはあらす。幸に佛陀の靈護と諸先輩の擁護に賴り、吾等が拳々の誠を盡さんと思ふあるのみ不宣。（依田生記）

●大宮の教勢

昨一ヶ年間の報告は岩崎氏の手によりて詳にするを得たり。氏が單獨無教地の大宮に入りて鋭意布教に從事することゝに三四年、氏の力の強きには何人も感謝せざるを得ず。報告左の如し。

一、法話　毎月自宅にて三回浦和町にて一回都合四回つゝ催し、專ら信仰を鼓吹せり。會するもの毎會十五名内外にして餘り多しといふを得ず。然れど無信無教の此地に於て這般の會合あるは寧ろ異數なりといふて可なり。されば人之を評して、未曾有の大會なりと。

二、演說會　毎月一回公開し主として佛教に道德方面を發揚せり。本會は大會として春季に降誕會を修し、夏季に衞生講話を開きまた秋季に紀念大傳道會を擧行せり。而して本會の爲に先輩教友諸賢の應援を乞うしたるは身にとりて感謝に堪へざる所なり。

三、婦人會　毎月一回會合し婦德と宗教の關係について說話し來れり。また主婦に節約の美風を養習せしめん爲に家事費を省きて毎月貯金を爲さしめたり。

四、研究會　以上教務の餘暇には土地の少年に英漢數など教えたり。特に日鐵大宮機關庫研究會の講師として一昨年以來教授し來れり。

五、教會堂　一昨年以來會堂建築の目的を以て毎月法禮として納金せしものを悉皆取纒め信徒總代の名を以て銀行に預けたり。然れど總額僅に金四十圓に過ぎず。大あり醋評して曰く此位にては汝百歲の後にあらずば建築にかゝるを得じと。

●土曜講話の概況（第二求道會）

◎一月九日

近角先生要用の爲め京都に趣かれしを以て曉烏敏氏代講せらる。演題は人生之基礎にして、乃ち世間のものは皆悉く變化動搖するものなり、かゝるものを基礎とする時はまた動搖を免かれず。眞個に永劫不動の基礎は唯佛陀の信仰にありと演へらる。當日の來聽者四十餘名。

◎一月十六日

近角先生未だ歸京せられさりしを以て、北村教嚴氏出席代講せらる、演題は　宗教の制裁にして、社會の制裁は犯すべくまた免かるを得べしと雖も獨り宗教の制裁に至りては犯すべからず、また決して免かるべからざるものなり。これ宗教信者にありては自己を顧みては佛陀の冥見に慚づれはなり、と。當日來聽者三十餘名

◎一月廿三日

近角常觀氏出席、演題は　求道の眞意義と題して述べられたり。當日の講話は求道第一號に掲載せられたれはこゝに畧す。當日來聽者六十餘名。

◎一月三十日

近角常觀氏出席、演題は　執持の解なりき。本日の講話求道雜誌に所載せらるとの事なれはこゝに略す。當日來聽者六十五名。

◎二月六日

近角常觀氏出席、演題は　佛陀は光明なり、生命なりき。從來信仰を求めんとする人々が、佛陀とは如何なるものなるやといへる疑問を起して其解答の得られさるに煩悶せらるゝ事多し。然れども佛陀は爾かく哲學的理論的のものに非ず、佛陀は實に我等が煩悶苦痛の爲に前途の暗黑なるを照破する光明なり。而して又人生の激烈なる風波の爲めに氣力を失へるものをして永久無限に活躍せしむる生命なりと。當日來聽者六十餘名。

◎二月十三日

近角常觀師出席、演題は　宗教的自信と外戰、求道雜誌に掲載せらる答なれはこゝに略す。附記第二求道會の開かるゝ九段佛教倶樂部は市中にても往來の盛なる九段坂の中間にありて、坂上に靖國神社あり。其傍には近衞第一聯隊の營舍あり。此頃は倶樂部の門前の如きは常さへ往來の繁きか上に軍人を加へて絡繹織るか如く此光景に相對して今日の講話、來聽者何れも一層深く感したる樣子なりき。

◎二月廿日

近角常觀氏出席、演題は　己を淸むるものは世を淸む、先つ己を淸めんとすればする程己の穢れたる罪障を自覺し結局人生の闇黑なるか感し茲に大なる佛陀の求濟を感得し、かくて歩々淸き方面に轉ぜしめらる。茲に至れば自ら人をして感ぜしめ一人より多人に及ぼし遂には世を淸めしむるに至る事を種々實驗上の例を引き來りて談話せらる。

當日來聽者四十餘名　此中最も感したりしは一人の上等兵なりき。別に講演場に上らず、入口の樣に腰かけて靜聽せり。中へ入らん事を勸むれは今暫くにして出征せさるべからずといひて微笑し又茵の如く聽き居たりしか、間もなく立ち去りたり。思へばこの一席の講話彼の軍人の爲には或は此世の聽き終りとなるやも知るべからす。悲しかりき。嗚呼

◎二月廿七日

近角常觀氏出席、演題は　新藏の意義なりき。新藏とは決して願望慾求の滿足を意味するものにあらずして、靈界の偉大力を感得したる爲に自ら内に湧き來れる敬虔の念よりせらるべきものなり。といふ事を法華經の例及び華嚴經等を引きて先つ靈界の佛陀の大なる力を說明せられ。而して此佛陀の經文の尊き事及此經文を信仰の上より見れば行の生ずる事も自ら了得せられ、以て奈良平安及鎌倉各時代日本佛教發展のの結果、遂に親鸞上人の純他力教の起り來りし由來も明らかに知るを得。而して新藏といふも皆苦悶の信仰の上より溢れ出づる感謝の念に外ならずと說き及ぼされたり。當日來聽者廿五名。

●日曜講話の概況（求道學會）

▲一月三十一日（第四回）其後の日曜講話は益々盛會にして、國家多事の今日精神の修養に勉めらるゝは喜ばしき現象なりと云ふべし。

本日は甲府師範學校長太田秀穗氏の來會せらるゝあり、同氏一席の講話を快諾せられぬ。初めに近角氏は永久の安慰に就て吾々は一歩〳〵佛陀の理想をたどり進みつゝ以て永久の安慰を得ることを述べられたり。

次に太田氏は最大不幸の題の下に自身の實驗に就て、最も詳細に一時間餘に亙りて熱心に語られたり。講話の要領は氏自身の筆によりて本號の誌上にかゝげぬ。茲に委しきことは省くべし。氏はすでに五六年以前に於て最愛の妻と別れ、一人の幼女をそがわすれ形見として守りつゝあり。氏が當時の回想談をきくに及んで吾人は氏を熟視するに忍びざるものありき。噫これ最大の不幸か、否、未だ曾て不幸に遇はざりしものこそ最大の不幸なりと、氏の談話終りて例月の茶話會に移る。

▲茶話會（一回）講話意外に長かりしを以て、時すでに午に近かく近角氏談話の外、互に相語るの機を得ざりしは遺憾なりき。出席者五十餘名次回を約して散ず。此日好晴。

▲二月七日（第五回）佐々木月樵氏は如來の實在に就て最も明白に語られたり。曰く、如來の實在を如何にして證明すべきか、實在の證明をきかざる中は信じられぬと云ふ人あれども、見覺もなく證據もなき如來の實在を尋ねたりとて徒にさかすのみにしてたゝ苦むのみ、悶える計りなり。如來はすでに我身の近きにあるかも知れぬ。盡日尋春不見春、芒鞋踏遍壠頭雲、歸來却過梅花下、春在枝頭已十分、遠く如來を尋ぬるに及ばぬなり。尋ぬる心即ち如來の實在を證明し居るにあらずや。之を外に求めるに及ばぬことを說き、更に法華經の長者窮子の譬を引きて叮嚀に語られたり。次て近角常觀氏はプラトンの愛に就て、絕對美、絕對善、絕對大の理想を說き、更に理想の他を靈化し去るを語り、次てダンテのベヤトリチエを述べて彼が敬虔なる信仰に及びぬ。而して華嚴經の善財童子を語り、文殊普賢の兩菩薩を示し、最後に親鸞聖人の靈夢に及び理想の光明を以て人生の意義を發揮せらるゝを述られぬ。此講話は求道第一號の社說として揭けし「活ける理想は人生を靈化す」の一文としてあらはれたる也。吾人は玆に詳說の要なし、希くは讀者諸君の再讀を請ふて止まざるもの也。此日聽衆七十名あまりなりき。

＊　＊　＊　＊　＊

▲二月十四日（第六回）楠龍造氏は眞宗の特性二三を擧けて述べられたり。而して一向專念に彌陀一佛によりすがることの特色は他宗他派になき所にして、これ眞宗の最も發達したる點なることをいはれたり。次に精神的自覺として近角常觀氏は鎌倉時代の國民の偉大なる信念をきたへ得たるは、畢竟內亂の暗黑時代を經驗し來りたる結果にして、其信念の發洩としてよく外難に當り之に勝ち得たるを思はゞ、國民の自覺最も急なる所以を述べて。今や我國は露國と戰端をひらくにいたりぬ、慘憺たる舞臺を過ぎて平和を見るに至るとせば、現時の吾國民は大に精神的自覺を要する機に遭遇せりと云々。此意味を敷演して多分本號社說にかゝげらるべし。聽者五十餘名。

＊　＊　＊　＊　＊

▲二月廿一日（第七回）曾我量深氏は潛在の力と題して首楞嚴經の例話に就て語る所あり。而して吾々は潛在の力を明に認むるものなることを悉しく述べられたり。次に近角常觀氏は靈界の力として、時局問題に就て各宗に於て盛に加持祈禱を行ひ甚しきは敵國降伏を標榜するものあり。加持祈禱もとより可ならざるにはあらざるも、之によりて結果を求めむとするが如きは宗敎の本意にもあらず、佛敎の旨意にもあらざる也。勿論吾々は赫々たる靈界の力を認む、さりながら之によりて現在の幸福を禱るか如きものあらば、頗る淺薄の人と云はざるべからず。親鸞聖人は父母孝養の爲め一篇の念佛たりとも申たることなし。禱らずとも神や護るらむ、の見地に至らざれば、未た信仰の地盤に立ちたるものとは云ふべからずとて。更に現世利益和讃に就て述ぶる所あり、時節柄最も聽衆の感を惹きたるやに覺ゆ。此日六十人あまりなりき講演はてし頃は早くも十一時を過ぎぬ。本日の暖かさは非常にて雲は低く垂れて空模樣何となく穩かならざりき。

◎遠足會（求道學舍）　我海軍旅順攻擊の快報は傳へられ、宣戰の詔は煥發せられたる翌十一日は恰も三大節の大祝祭にあたりぬ。此日を以て遠足會を企てられたり。されど夜來の雨は休みなく降りつゝき空は濛々たり。すてにして午に近き頃晴れを示しぬ。さらばとて一同舍を出てゝ上野より品川まで電車にて、それより路を品川街に取り大森まで步を進め、八景園に上りて小憩す。漸近くして脚下にあり。園に梅樹多し、暗香の動くあり。渴するものは風流を解せずにや、同人諸氏頻に茶を呼び、パンを呼び、密柑を求め、且つ飲み且つ飽き、縱談橫說怪焰當るべからず。すてにして年少諸君は角力を催すあり、一勝一敗笑聲盛に起る。後ち園を辭して近角氏縱橫氏の寓を叩く、あらず、直に滊車にて歸る、車中戰爭談を以て埋む。まことに愉快の極みなりし。半日の清遊依て如件。

◎佛敎徒同盟會（在米）　在米の鈴木悌君等發起となり、佛敎徒同盟會を組織し、昨年十一月八日第一回を開きしに出席者拾二名、次は同廿二日五名の出席者あり、協議の上事務所を借り受くることゝ、隔日曜每に講話を催すことに決し散會せりと云ふ。左に會計の報告を揭げて海外の景況を示さん。

收入合計九弗五拾仙（十一月分）
內譯（五拾仙宛）中村祐智、朝倉壯平、綿貫勝太郎、松島政次郎、牛山彌助、松村敬春、內村郁二、渡邊卯一（壹弗）仁生廓仙（壹弗五拾仙）鈴木悌（參弗五拾仙）
支出合計拾弗（差引五拾仙不足）
內譯七弗五拾仙（臨時會費）壹弗廿五仙（祝儀）六拾仙（帳簿）六拾五仙（郵稅）
支出二拾二弗三拾仙（十二月分）
內二拾弗（家賃）五拾仙（拾一月分不足）壹弗（廣告料）七拾仙（郵稅）拾仙（帳簿）
收入二拾二弗三拾仙
（一弗宛）松崎政次郎、朝倉壯平、原田金槌、村上三甫、天岡接三、福富正利
（五拾仙）渡邊卯一（二弗）仁生廓仙（二弗五拾仙）鈴木悌（十二弗三拾仙）
（書籍の寄附は之を略す）

因に云ふ、鈴木悌氏は熱心なる佛敎信徒にして、紐育コロンビヤ大學に學び、後印度に渡りベナレス地方にて佛敎を取調べられたり。三十四年四月伯林に釋尊誕生會を催せし時、秦氏幷に鈴木氏等も此地に於て同樣なる誕生會を催されたる也。而して今回遂に佛敎同盟會を起すに至る、今後同氏は時機を見て再び印度に遊ぶの志ありと云ふ。

◎戰は開かる　久しく結んで解けざりし日露國際間の問題は、天に轟く砲聲と共に解決は促されたり。仁川冲の勝利、旅順の攻擊何ぞそれ勇ましくして壯なるや。かくて宣戰の詔勅は畏くも喚發せられぬ。我軍の士氣大に奮ひ意氣天に冲し、眼中すでに露軍なきが如し。東洋露艦の全滅はすでに〳〵近けり、幾十萬の貔貅海を航して滿洲の野に、劍影鐵蹄の響をきく時は將にこれ露軍白旗を樹つるの日なり。勝敗の運命は一に士氣の振作如何に關す、宗敎家たるもの力を盡す正に此時にあり。而してこれ朝家の御爲めなり、國民の御爲めにあらずして何ぞや。舊へ、戰は開かる。

◎內務省　は去る十九日佛敎各宗派管長に向て內務大臣は左の訓令を發せられたり。

宣戰の　聖詔は既に煥發せられたり國民皆其心を一にし以て奉公の誠を效すべきは固より言を待たず職に管長の責にある者深く此意を體し其敎宗派內の敎師を督勵し之れをして各其任務に依り國民奉公の至誠を完からしむる所以の道を講せしむるは勿論其寺院敎會所等に關する事業に付ては能く其輕重緩急を計りて之が節略に力めしめ以て其の本分に反くことなきを期せしむべし

國交は既に絕へたりと雖ども其臣民に對しては固より秋毫も敵意あるべきにあらず殊に宗敎に對しては其敎派如何を問はず平等一視更に平素に渝はることあるなし是れ洵に布敎傳道に從事する者の最も深く其意を致すべき所なりとす管長たる者宜しく今に及んで派內の敎師に懇諭し苟くも事體を誤ることなき樣篤

く留意せしむべし

「日本」新聞はそが社説に於て評論して曰く、日本の宗教各派は此の位の普通的條理を解せざるものか。解せざるに非るまても、斯る常理に屬する事體を誤るが如き恐れありとせば、彼等は殆と宗教家たるの資格なきものなることを論して、ニコライ主教までも告文を出して、これと同樣の意味を同信徒に告けたるにあらずや。此の内務省の訓令は各派の爲めに耻辱たるのみならず。抑國民全体の耻ちなるとを極力詳論せられたり。吾人も亦同感に堪へざる也。文相の提灯訓令と近來の好一對として、其憾を嗤ふもの多し。

◎ニコライ主教の態度　戰はひらかれたり、露公使は退き、凡ての露人は退去するにも拘らず。ニコライ主教は頑として我國に留まり、死を以て彼か宗教を護らむとして、一篇の告文は彼の信徒に頒たれたり。彼か態度として見るべきは今後自ら公祈禱を行はざること是也。中に云へるあり。

夫れはハリストスの正教は人々に各々其國の爲に忠愛を守り、自國の皇帝に忠節を盡すべきを命ず。即ち我らは日本國民なるを以て、我が日本の天皇陛下の爲に忠節を盡し、其尊榮と特に有事の日に於て勝利萬福を祈らざる可らず。然るに今や我と彼の兩國は互に砲火を以て相見ゆるの非常時期に際し、ロシヤ人たる彼が此祈禱に與かるは、頗る不適當なれはなり。されど我ら日本國民たる信者が大日本の　天皇陛下の爲に勝利を祈り、凱旋を祈禱するは、最も正當の大務なるを認めて、之を勸めたり。彼は衷心より溢るゝの熱情を以て我れ日本のハリステアニンが軍國の事に忠勇節烈なるを勸めたり。云々。

◎政界　一日を以て衆議院議員の撰擧は結了せらるゝべく、而して本月末を以て臨時議會召集せらるべしと云ふ▲芳川顯正氏は入りて内務大臣の椅子を占むる▲政府一億萬圓の公債を募らむとす應するもの殆と三倍を過くと云ふ、これ皆愛國の至誠より出つ▲出征軍人の美談多し、此に於て乎深勇公に奉ずべしとの詔勅空しからずと云ふべし。

◎教界　前高輪學長前田博士は此度東片町に傲塾と稱する私塾をひらき。主として内典を講ぜらると云ふ▲佛教の婦人會軍資金に献納するもの多し▲從軍布教師を派遣するもの各派に、就中西本願寺最も之を勉む、而して通譯官の採用せらるゝものは東本願寺に多きが如し▲東本願寺は去月廿五日を以て全國の門末を召集せられたり▲兩本願寺の管長は時局問題に付内務省より東上を促されたり、其結果として兩派は各門末に向て訓辭を發したり▲太田覺眠氏本派の布教師として浦港にありしが、この度歸路を遮られて敵地に殘留せる同胞を慰問せん爲め、獨り敵國内に踏み入る決心をなしゝと云ふ、壯烈とや云はむ。知人の許に送れる書簡の一節左の如し。

野鶴は素より生還を期せずたゞ一日にても長く露命を保持して一人にても可成多くの人々を慰問したきは野鶴の心願なり

旅順開戰の報は已に聞得たり當港には戒嚴令を布けり唯今川上事務官の引上を見送る後は日本人は當港にたゞ野鶴一人のみなり目下露人の暴行よりは寧ろ支那勞働者が家財を奪はんとして襲ひ來る勢甚猛烈なり一人の力到底之を防ぐ能はず今夜は須彌壇の下に隱れて一夜を明し此等勞働者の掠奪を恣にせしむべし然れども最早戒嚴令を布かれたる後なれば日本人の當港に留まるを許されず明朝は早々ハヾロフスクに向つて出發すべし次て黑龍江沿岸各地の同胞殘留者を歷訪慰問すべし

野鶴の此行必ず佛陀の冥助あらせ玉ふを確信す謹んて　陛下の萬歳を祈り奉る

二月十二日最終引揚船浦潮斯德棧橋にて認む　太田覺眠

＊　＊　＊　＊　＊

編輯餘錄

◎甲府師範學校長太田秀穗氏一月廿日夜求道學舍を訪はれ翌日の講話に出席して歸府せられ候。

◎去月十五日抗州日文學堂長伊藤賢道氏訪はれ候。氏は今後獨力を以て學堂を經營すべしとの事也。而して支那僧を顧慮して開明の人たらしむる決心の由に候。

◎池山榮吉氏はかねての宿望たりし社會事業を計畫せむ爲め、こたび煙草店を開

設し、利益一切を擧けてその事業に投ずる覺悟の由に候。社會事業は極めて難問題也、然れども學識あり、活實なる氏により優に成功せられべく候。また成功せられむことを望むものに候。

◎近角氏の信仰問題愈々出版せられ候。これ氏が洋行紀念として永く珍重すべき書也。就中美麗なる寫眞版と本版は大に本書を飾るに足る事と存し候。

◎信仰を求むるの士近來著しく其現象を認められ候。遠く書を寄せて苦悶を訴ふるものあり、又は講話後、何事か求めむとせらる人も有之候。人は戰爭に醉ふて修養を空しくする時、これ頗る喜ばしき現象と存候。

◎曾て英國に航し感化事業を視察せし伊東思恭氏は、今回日本感化學院を組織し四五月頃より開院して、滿十六年未滿の刑を受けざる不良少年を左の三種に分ちて收容し感化せらるゝ由に候。

一、自費　二、半給費　三、全給費

尚に細詳を知らむとするものは府下北豊島郡巣鴨村字巣鴨一七六三伊東思恭氏宛照會さる可く候。

◎只今無窮堂主人のたよりに接し候。

拜啓、先日は早速御郵送を辱し奉謝候。偖小生儀一兩日前家族中に一國民兵を增加し、初めて「ファーザー」たる資格を得候。原稿は少しも書かずして此の如きものを作り置候は、實に近角兄の所謂罪惡の火なるものと存候。乍去、是が田園閑居の一大傑作と確信致候まゝ、貴兄迄一寸御披露申上候御一笑被下度候。早々

無窮堂主人

小石川白山御殿町一一〇、和田鼎

◎轉居

求道會館設立喜捨受領報告（第四回）

一金貳圓也　即納　信州　宮崎とも子殿
一金五拾錢也　即納　越前　笠松宗右衛門殿
一金壹圓也　即納　美濃　澁谷政尾殿
一金五拾錢也（第一回）即納　埼玉　某婦人殿
一金壹圓也　即納　薩摩　中山祐晴殿
一金拾圓也　越中　積良大玄殿
一金四拾圓也（第一回）即納　日本橋　西澤善七殿
一金五拾錢也（第二回）即納　日本橋　松島肇殿
一金壹圓也（第一回）即納　赤阪區　梅野薫殿
一金壹圓也　即納　山口縣　上坂勝海殿
一金貳圓也　即納　本郷區　宇野はつ殿
一金拾圓也　即納　秋田縣　小西傳助殿

小計六拾九圓五拾錢也
通計七百四十四圓二十五錢也

注意

一、喜捨金爲替振局は本郷區森川町郵便貯金爲替取扱所宛若くは第一銀行宛御取組み奉願候
一、爲替受取人宛名は東京本郷區森川町一番地求道學舍近角常觀宛にて御送附奉願候
一、喜捨金御送附被下候節は直ちに發起人より受取差出し月々求道紙上に於て報告可仕候
一、喜捨金は直ちに第一銀行に預け込み可申候

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まむとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現、せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也　昨年已來、聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引き繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め。また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に從ひしが。幸に佛陀の冥祐と、師友の同情とによりて其期する所空しからず。學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き。假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す幸に篤厚なる先輩の指導に從ひ、忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行によりて漸次其結果を擧けむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛敎徒に屬する會館の設なく、其不便を感する事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未た容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まむことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設のき如若し燎原の一點火たるを得は幸之に過るなし。冀くば四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月

發起者　近角常觀

贊助者（いろは順）

理學士　稲葉昌榮
理學士　池山覺成
理學士　今川盛喜
理學士　石橋時善
文學士　板井澤次
文學士　今泉三郎
文學士　北條辰次
文學士　西尾十次
文學士　本多義
文學士　朝永三郎
文學士　常盤大定
文學士　大内青巒
文學士　大草慈
文學士　小河滋次郎
文學士　狹野仲三郎
文學士　岡田治衛
文學士　和田鼎

醫學博士　柏原文太郎
文學博士　吉田賢龍
文學博士　吉田靜致
文學博士　高橋哲雄
文學博士　寶山了
文學博士　月見雄
文學博士　南條文雄
文學博士　村上專精
文學博士　上野文
文學博士　野村文
文學博士　久保田文雄
文學博士　前田慧雲
文學博士　松本文三郎
文學博士　鼠岡久馬
文學博士　丸井道了
文學博士　藤島治郎

文學博士　藤井健治郎
文學博士　姉崎正治
文學博士　安藤太郎
文學博士　秋野孝道
文學博士　澤柳政太郎
文學博士　齋藤唯信
文學博士　佐藤愛海
文學博士　酒井眼
文學博士　境野哲
文學博士　三生義
文學博士　櫻井敬愛
文學博士　白鳥庫吉
文學博士　島田重禮
文學博士　島好默
文學博士　新渡戸稻造
文學博士　杉村廣太郎
文學博士　村井保固
文學博士　田中館愛橘
文學博士　地藤久米三郎
文學博士　養育院幹事

文學士近角常觀先生著

信仰問題

如何にして信仰を得可きかとは、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すべきかとは二十世紀の問題也、本書内篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也。

内篇には内的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理、等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を叙するに至りて慈光春風の世界に遊びて攝取の清懷に悟融するの想あらしむ。

外篇は社會の病源に向て根本的の救濟を施こし、理想の淨國を現世に實現せんとする者、歐米各國の宗教界及び社會事業を紹介し、飜て佛教原初の眞精神を說き、將來、清新にして且つ健全なる社會的經營を鼓舞し來るものあり。

本書卷首に米國シカゴ青年會館。英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖書飜譯室、佛國宗教歷史大會の寫眞石版圖を掲げ、附錄として著者洋行中の通信及び旅行記を收む、趣味津々聊か讀者を慰むるに足らむか。

發行所　東京本郷四丁目　文明堂
取次所　東京本郷森川町一　求道發行所

既刊

菊版二百頁以上
洋裝總クロース製本美麗
代價一册六拾錢郵稅拾錢

秋水三浦覺玄氏著

戰爭と婦人

（四號かな付（貞烈勇四六版美本）愛なる婦人諸君の好伴侶なり）正價壹五錢郵稅四錢

嗚呼世界未曾有の大戰爭は起れり。殺氣天に横はり、忠勇なる同胞は戰勃十年の苦節を貫く時到れりとし、勇武妖雲地を蔽ふ。陸海の將士は猛迅飛躍、劍を按し、死を決して胡沙の地に向ひ、第一の勝報既に至り歡呼の聲、天地に滿ち愉絶快絶實に今日の如きはあらず、此時に於て偏へに我同胞婦人の志氣を鼓舞し、國民の義勇奉公の丹誠に一層の美花を添へんとするに在り。夫れ婦人は天性自ら劍を提げて戰ふものにあらずと雖も、熱誠火の如く然へて情熱自ら止まざるは、況んや我國上三千載の歷史は光榮ある日本婦人の半面たるべからざるに於てをや。此書實に國民の敵愾心の導火線なると共に、志氣發展の總指揮官たらんことを期す。君し土を慰し土を勵まし、紅血振起以て世界無比、古今卓絶の日本婦人たる大面目を發揮し玉ふべし。

東京本郷四丁目五番地　文明堂

安藤州一著　二月十日出版

清澤先生信仰座談

（和珍美本　定價拾五錢　郵稅三錢）

本書は、著者が清澤先生に侍するの日、親しく先生の信仰を敲きて、其得る所を記せるもの、最後の安慰、パン問題の解決、妻子問題の解決等、凡て靈活なる信念に由て、人生の苦悶を排除し、如來の靈光に乘托するの道を敎ゆ、讀者若し之れに由て安慰を得るあらば、著者の光榮也。

東京市本郷區曙町十六番地　浩々洞出版部

無盡燈

三月一日發行
第九卷
第三號
一部十錢
一ヶ年分壹圓

▲研究▼

◎華嚴經と密教の關係　河野法雲

◎天臺宗の變遷と淨土日蓮の教義（その二）　石井主馬

◎倶舍宗に於ける因果律概觀　橋川德龍

◎佛教認識論　伊藤龍知

▲雜纂▼

◎禪と眠催術　藤井文浦

▲修養▼

◎求道の用意　住田智見

◎蓮如上人に就て　諸同人

▲時論▼

◎三界皆苦と精神的交通（筑川）◎社會の宗教的同化（台坊）◎經典聖教の解釋（靜處）◎戰爭と社會主義（皷山）◎修養の好時機（白峯）◎宗教的文藝（石嶺）◎南濃僧侶諸士の決議（文浦）◎現代の思潮と個性の價値（雅川）◎二月の誌壇◎近畿◎丙申會々報

發行所　東京府北豐島郡巢鴨村眞宗大學內　無盡燈社

規定

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす

一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず

一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事

一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事

一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事

一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事

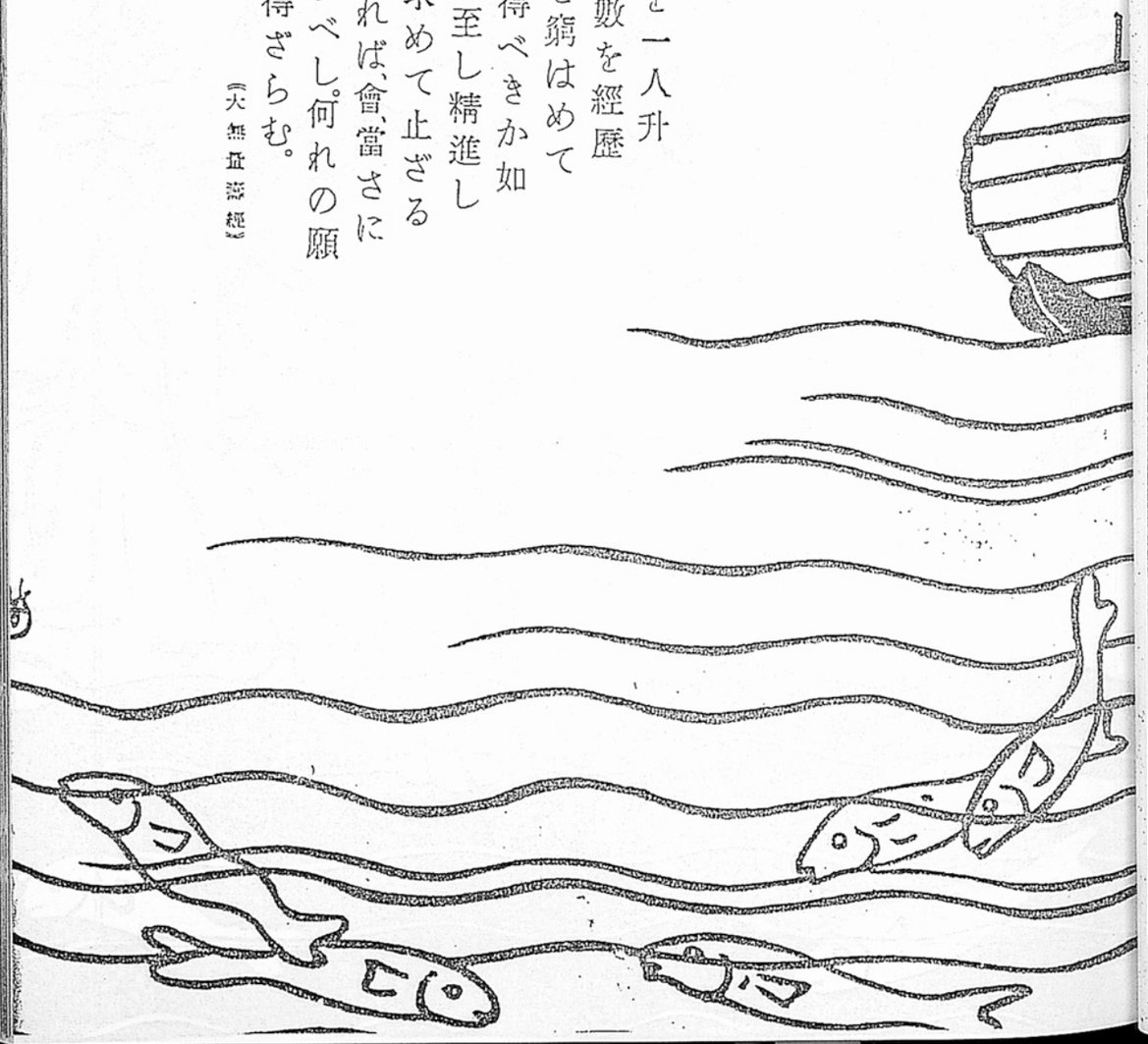
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年二月廿九日印刷
明治三十七年三月一日發行

發行兼編輯人　百目木智璉
印刷人　白土幸力

發行所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所
（電話下谷二四三二）

大賣捌所　東京市神田區神保町　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂

譬へば大海を一人升
量せむに刼數を經歷
して、尙底を窮はめて
其妙寶を得べきか如
し。人、心を至し精進し
て道を求めて止ざる
ことあれば、會、當さに
覓果すべし。何れの願
をか得ざらむ。

（大無量壽經）